WASON
HQ
1104
J74

Apr...
no. 40

明治十八年初刊

女學雜誌

毎月廿五日發兌

第四百九號

要目

明治十年の西郷南洲
新領地と婦女子
海外傳道論
南北論
頼政
日蓮
月下櫻
朝鮮國家庭
近松門左女氣質
「岡山孤兒院」を讀む

明治二十八年四月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九號目次

社説
新領地と婦女子

評論
明治十年の西郷南洲◉南北論◉きやうと◉岡山孤兒院を讀む◉海外傳道論

隨感
月下櫻樹のかげ◉日蓮上人◉法界の莅宗◉乙女と農夫◉遠見の氣樂さ◉樹紋は面皺の如し◉自から愛敬の情あり◉識らず相從す

爛煥
歌仙賴政（櫻井鷗村）◉乙女ごゝろ（花里）◉愛の鏡（花影子）◉磯のうは風（櫻精）◉發句四十三首。春の山寺。閨のうれひ。春の夜のいのり。深山の小川◉をさな子（泡鳴子）◉さびしさの美と厭世（無識庵主人）。

女學
近松門左が女性（一、帝國文學）◉朝鮮國の家庭

片々
皇后陛下行啓紀事の文

前號目次

社説
天佑を感知するの畏

評論
形神論◉博愛社の事業◉丁汝昌自殺の辨

隨感
小橋君を憶ふ◉遠離のおもひ◉只だ信ぜよ◉傳道は傳心にあり◉慕ふものこそ厭ふなれ◉人力車夫◉山路の電信線◉四面白雪◉松を花として

女學
順良の妻は良人之をつくる◉食時會話の説◉子供のはなし◉女子の本分を讀む

爛煥
女生文學に就ての所感（愛軒）◉夕日影（花影子）◉女の天職（白衣）◉誰れかいふ◉折にふれて◉戀◉憫なる乙女心◉御國の兵士（空花）

開書
日本の姉妹に訴ふ（外國婦人數名）

片々
源綱紀未亡人◉婦人新報新に出づ◉一葉女史◉一藝愛の沈默◉產婆西尾京子◉全國醫師の數◉一藝に達するもの皆道あり◉統計學の名家杉亨二君◉宗教的の情死◉日本の家庭◉最も有効なるは下等婦人◉金玉均未亡人遭難日記◉朝鮮婦人日本に來る勇ありや◉熊本市の高等小學女生◉世界一週の自轉車婦人◉蠶を朝鮮に養はんとす◉東京感化院女子部◉女性の文學◉埼玉縣下の存娼論◉女かみゆひ◉朝鮮婦人の交際◉東甕に女丈夫あり◉女子不就學の原因◉歌舞伎新報◉漢城新報◉一年間吾少女の研究◉英國女王がビーコンスフヒールドを酷信せし所以◉万國幼兒保護會◉子供の研究◉平安女學院

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずして院長は太たく心を痛めらるゝ由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歳に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんとを祈る。之が爲めに定むる所の憲法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名げて孤女學院特別資金と云ふ。

二　此資金は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業（最初は養蠶）に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四　收益の二分五厘を以て孤女の貸銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

嚴本善治　石井ちか

小鹿島筆　加藤さし

田村武治　津田むめ

名出保太郎　小島きよ

古在さよ　背木まさ

平野はま　杉浦義道

右義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山縣伯、大山伯題辭、勝伯題詩、三上參次君閲、泰東勝田孫彌君著

西郷隆盛傳

全五冊完成

各卷再版出來○

特價一冊金三拾錢　全部金壹圓卅五錢

郵税一冊六錢　全部二十錢　切手一割增

○本書に挿入せるもの隆盛の肖像、隆盛眞筆の書翰三通、律詩一篇及び地圖二葉

本書は著者が二十三年春以來熱心に調査して著せる**蓋世の英雄、維新回天の元動力**なる**隆盛の詳傳**にして本書の出るや各新聞は**記事正確、叙論公平、近來の好著述**と**評**し又大に**世の稱贊**を得たり今批評の二三を左に抄録す

●日本新聞　維新の洪業に大關係あるもの三人あり西郷南洲は其一なり大久保甲東は其一なり勝海舟は其一なり（中略）本書は其の一人に就て最も大關係ある西郷の公私に繋る性行閲歴を詳細に叙論せるもの（中略）其材料の撰擇、評論の精確ともに利益を主として編纂する坊間の出版物に徑庭あるは必ず讀者の認むる所ならん云々●東京日々新聞　南洲の性行を叙するもの從來其書に乏からず而かも其事實の正確其評論の公平此書の如きは稀なり云々●東京朝日新聞（前略）此書完成の日は一旦叛賊に汚したる南洲翁其精神は之に由て落々後世を照すものあらん云々●國民新聞　西郷南洲が維新英雄中に首座を占むべき人物たるとは之を言ふもの多しと雖も多くは抽象的贊辭に止まりて其委曲を知るに由なし（中略）今勝田孫彌氏の著述に係る隆盛第一卷を見るに（中略）南洲の履歴を詳悉すると同時に心中の委曲をも紹介するに足るべし●毎日新聞　此れは是れ南洲翁の詳傳にして其精確なる者坊間傳ふる所のものと天壤月鼈著者の苦心以て見るべき也云々●中央新聞　勝田孫彌氏の編著なり事實最も精確、叙事に序あり一句苟くもせず（以下略）●女學雜誌（前略）此傳確かに隆盛傳中の最良のものたり茲に始めて首尾連續し因果明應したる好傳紀を得て近代の偉人が眞本領、やうやく發輝せらる（以下略）●福音新報（前略）吾人が有らゆる西郷傳に遺憾を訴へしは搜索拮据未だ悉さゞるにありき然るに此書や稍や吾人の遺憾を償ふに足れり云々

泰東勝田孫彌君編

徳川封建時代日本地圖

全壹幅　彩色鮮明

定價　別製金八拾錢　郵税金四錢　○切手代用一割增

此地圖は編者近世の歴史を研究するに當り完備せる封建地圖なき大に其不便を感じ現時行はるゝ最も精確の地圖を基礎とし徳川時代の諸書地圖等に參照し編製したるものにて各藩の彩色を以て**城代、奉行所、三藩、家門、外藩、譜代**の區別を明にし又各藩の氏名石高を記す故に**諸藩對立**の形勢を知るのみならず**大雄徳川家康**が**其子孫**をして**三百の諸侯**を統御せしめたる**遠略遺圖**を一目の下に明瞭ならしむ

為替振込東京銀坐　**發行所**　東京市京橋區彌左衛門町　**東光館**

取次大賣捌所　東京京橋區尾張町東海堂●仝銀坐博聞社●仝神田表神保町東京堂●大坂東區盛文館

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

嶄新看護學書發刊廣告

獨逸ドクトル、ビルロート原著
日本醫學博士、北里柴三郎先生序
日本ドクトル、佐伯理一郎譯補

（總紙數凡四百餘頁 挿圖凡六十個）

普通看病學

全二冊　卷一　正價金卅五錢郵稅金四錢　卷二　續出

そも婦人の學ぶべき道に就きて看病學の大切なる事は昨年來の日清戰爭によりて普く世の人の知るところとなりぬまた婦人諸姉に於ても少くとも其の一とはしな窺ひ置くべきの學術なる事を知り給ひぬさるにても是まで我が邦に於て出版せられたる看病學の書その數多からぬのみならで充分にその意を述べその味を含ろの書なかりしはまことに斯道のため惜むべきの事なりきこゝに獨乙國にて有名なる外科の大家「ビルロート」氏の著せる普通看病學なるものありこは「ビルロート」氏のいとも深き學識と博き實驗より得たる著述にしてその親切叮嚀なるを彼國に於てすら之にまさるものなきほどの良書なれば此度斯學に經驗多きドクトル佐伯理一郎氏に乞ひ之を譯して世の需めに應ずる事となりぬさて之を譯するには極めて簡明なる文章を用ゐ且つ我邦の風俗と習慣に照し合はせたれば世にありふれたる飜譯書にすぐれてめでたきものなりされば世のこの業を勤むる人と志からざる人とを問はず之を購ひ給ひて國に事あり人に急ある時はその學ぶところによりて世のため人のために盡しまた常には之によりて一家の災害を救ひその健康を護り給はゞこの書を世に出したるの勞もまた酬ひられたるものと云はめ

獨逸ドクトル、リューレマン著
日本ドクトル、佐伯理一郎譯補

戰時 平時 救急看護法

全

正價金卅五錢
郵稅金二錢
挿圖百卅七個
懷中手帖形

（印刷鮮明 紙質良好）

此書は獨逸國陸軍一等軍醫ドクトル、リューレマン氏の原著にして戰時及平時の救急看病他に病人運搬法を極めて平易に且つ一々精密なる圖畫を以て說き明し未だ嘗て看病法及醫療の事を知らざる素人といへども一たび卷を開けば火急の際立ろに救助の望を遂げられ加之小き手帖形にて衣服のかくしに入るべき便利の製本なり其如何に緊要にして世の需用に欠く可らざるかは最初の出版以來毎年一回以上つゝの出版を重ね今や已に十數版に及べるとにても察知せらるべし世の從軍者、醫家、警察官、看病人は申すに及ばず赤十字及衞生の事業に熱心の人、滊車滊船及製造場に從事の人、學校教員並に注意深き一般の人々は各一本を購ふて不慮の災難に備へ玉ふべし

東京本郷區龍岡町卅四番地 **吐鳳堂** ◉ 東京日本橋區馬喰町二丁目 **英蘭堂**

副島種臣伯 犬養毅君 序
島田三郎君 尾崎行雄君
圓城寺淸君執筆

大隈伯昔日譚

全一冊
大隈伯肖像入

洋裝菊版凡八百五十頁　定價金壹圓五拾錢
豫約　上製壹圓　並製九拾錢　豫約申入期限四月三十日
郵稅金貳拾錢　送金の順序に從ひ五月一日より發送

大隈伯昔日譚は、伯が少壯時代の經歷及佐賀藩當時の事情より說き起して明治六年に於ける征韓論に及、其間雜出紛起せる幾多の大問題大事件は大概之を網羅し。而して伯が燃犀の眼を以て之を觀察し、卓拔なる意識を以て之れを判斷したる意見議論は勿論、親しく之に關係して爲したる壯快なる運動の顚末は、之を明快雄健なる執筆者の筆にて縱橫に描寫して遺すなし。左れば、此書は、維新前後より明治五六年の頃に至るまでの間に於ける大問題大事件に關する伯の意見議論と兼れて之に對する運動とを悉知するに足る可き眞箇の**自叙傳**たるのみならず、實に精緻雄大なる**維新改革史**若くは**明治當初の活歷史**として見る可きなり。伯を知り、且つ其の當時の事情を審かにせんと欲する者は、必らず之を一讀するを要す。今、其の目錄を擧ぐれば左の如し

少年時代の經歷及佐賀藩當時の事情（上下）○幕府列藩の形勢及維新改革の原動力○維新前後の外交事情○大政返上の眞相○外交の初陣○宗教問題○蝦夷問題○德川家處分問題○遷都問題○橫須賀恢復、軍艦兵器買入、及江戶平定等の諸問題○鎭將府○英人暗殺事件○財政に關する外交○藩籍奉還○封建と憲法○進步主義と保守主義消長○廢藩置縣○廢藩置縣後の改革○使節派遣中の政事○征韓論

○爲替三澤常次郎宛にて新富町郵便爲替取扱所へ御振込の事

發行所（豫約申込所）　東京麴町區有樂町一丁目九番地　**立憲改進黨々報局**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第四百九號
明治二十八年四月二十五日發兌

社説

新領地と婦女子

新領地は、速やかに、帝國に順化せしめざる可らず。之れ、新領地住民の幸福にして、帝國の義務なり。若し、大朝鮮國の爲めに言はば、其の國粹を啓發し、之を養成せざる可らず。大朝鮮の爲には、眞平に其の獨立せんことを望む耳。新領地に至ては、然らず。帝國の國粹を採り、帝國の國法に順ひ、言語も、文字も、慣習も、風俗も、一に帝國の如くならしめんとは、即はち其の最先の急務なり……。此に至て、數多の方策あるべし。吾黨は、先女學に關するものを掲げ告んと欲す。移住植民の成否は、尤とも多く、家庭の和樂の有無に關す。左なきだに、故郷は慕はしきものを、此の美なる山川風土の大日本を去つて、草茫々たり、原漠々たる、滿洲、台灣の未開地に移らんとき、家庭の幸福なくして、何如で能く久しきに耐へんや。此を以て、婦女子の植民地に於けるは、其の花の如し、亦た、泉の如し、亦た、樂園の如し。人は、茲に遊樂し、茲に潤ひ、茲に美を娯しむ也。左れば、新開國たる亞米利加合衆國に於ては、婦女子の勢力自から高し。家庭の幸福を主とせる大英國民は、天下の到る處ろ、植民事業に成切を奏す。曩に、黒田開拓長官の北海道を拓かんとするや、微妙じくも、此の秘決を察して、夙く女子敎育に掛念し、新日本に於ける最初の女學校を開き、最初の女子洋行留學生を發としたれど、惜むべし、經綸長きに續かずして、半途中廢せり。夫れ、速やかに、着眼するも、尙ほ効能の全からざるよ如斯し。當に速やかに着眼着手すると共に、大ひに且つ長えに此の經綸を實行すべき也。

且夫れ、風を替え、俗を更ため、言語を新たにするの工夫、母によりて其子の上に影響せしむるより、迅速に、有効に、且つ、廣ろらかなる好結果、他に在るとなし。試ろみに、内

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

外人の雑婚せしものを見よ。父、日本人にして、母、外國人ならば、たとひ其家は帝都のたゞ中にありとも、其子は、自から外國人なり、其言語は自から外國語なり、其風儀は自から外國風なり。之に反し、父、外國人にして、母、日本人ならば、たとひ其家は居留地内、外人往來の眞中にありとも、其子の言語、風儀は、自から日本人也。左れば、内外人雑婚の上に於て、日本男子、外國の婦人を娶るときは、何となく勝利を得たる如く、日本婦人、外國人に嫁するときは、何となくヒケを取りたる如く感觸するの人情こそ、正に事實を顛倒したる見識と云ふべけれ。日本人を增し、日本風を殖やすの戰かひに於ては、日本婦人が盛んに外國男子に嫁するを善とす、勝利即はち之にある也。

故に、新領地に移住するものは、男子よりも女子の多からんことを望む。男子が移住して、新領地の婦女子を娶るは、一見躰裁好きが如くにして、實は『日本擴張』の上に於て損を爲すものと言はざる可らず。日本婦女子が、新領地人民の家内となるは、外見上、何如にも卑劣なる如く感ぜらるゝ節もなきにあらねど、眞とや『日本擴張』の眞實なる結果を奏するもの、之に若くはあらじ。……。故に、吾等は、可成く多くの婦女子が新領地に渡たりて其嫁となり、可成く多くの男子が朝鮮に行て其婿となり、朝鮮には朝鮮人いよ〳〵多く、新領地には新日本人の益〻加はらんことを望む。

二

人或は、日本人口の男女を比較し、吾國は不思議にも女子の數多からざるが故に、其多數に外に向ふべき殘餘なからんことを掛念するか。之れ寧ろ無益の思ひ煩らひたる也。國民大ひに膨張するの大時節に際會すれば、天必らずや多數の女兒を産す。之れ事實也、攝理也、歷史也。見よ、今後十數年の間、日本人口に於ける女兒の產出數は意外に大かるべし。況してや、男子之より猛志を立てゝ早婚の弊止み、婚することを得べき妙齡婦女子の數は、對比上に於て著ぢるしく增加すべきをや。相對數理の上に於る此憂の如きは、概むね無用なるべし。」

夫れ移住民の妻となるか、新領地人民の妻となるか。要するに今後の婦女子は、大ひに海外に向つて渡行飛躍するの氣象を煥發せざる可らず。之れ、將來の大勢に伴ふべき、日本婦女子の新たなる氣風なり。故に、將來の日本女子教育は、此傾向に於て、更に一進轉歩を下さゞる可らず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治十年の西郷南洲

西郷隆盛傳第五卷には、征韓論の破裂、十年の戰亂あり。卷を開かんとするに方りて、早く既に慘憺たり。

時に隆盛、大隅山に獵し、跋渉歷遊して久しく歸らず。弟小兵衞趨つて鹿兒島の形勢を陳じ、具さに激發の狀態を談ずるや隆盛喟然、大息して曰く、吾事終る、吾死せり、と。則はち、一身を放棄し、憮然として校黨の爲すに一任し、桐野以下が終始指揮總管するに托して、初より俠死を以て處したり。軍を出して家を去るや、家族に言つて曰く、吾等今や朝敵の地に立てり、汝等須らく不義の臣となること勿れと。永訣して去り爾來遂に家門に入らず、又一封の書信をすら送らざりき。戊辰の戰亂に際し參謀官として輔佐し參らせ、帝國一統の大事を遂行せし隆盛は、當年の征討大總督有栖川宮に對して、今は則はち賊軍の總督たり。吾等二人意見もし合せずば、刺違へて同もに死するの外なしと言ひける、竹馬の友、同心の友、終世の友たる甲東、南洲は、今や巨然として相ひ敵するものとなれり。拔擢して故郷に遣し、他日吾に代らんものと重別せし樺山資紀は、毅然として熊本籠城の主動力となれり。尤とも重んじたる山縣、河村は參事たり。子の如き大山は司令長官たり。鄕兵三大隊を獻じて基礎を立てたる近衞兵は、赤帽の名に於て尤とも奮闘せり。木戸は病死せり、篠原は戰死せり。國家が外に對して大ひに膨脹すべき眞誠の生命……熱誠剛健の男兒等は、敵味方續々として屍を暴らせり。忠愛の情け深き老西郷たらんもの、此時斷腸の感抑そもいかなりけん。海舟、歌ひて言ふ、

只だ身一つを打ち捨てゝ若殿原にむくひなん。

夫れ、西郷の感化力は二樣の活動を爲せり。別府新助等曰く、我黨先生を推戴して今日に至る亦謝する所を知らずと。桐野篠原等、形勢の止みがたく、騎虎の勢ひ挽回するの道なきを見て、成敗を天に任じ斷然決定したり。鹿島縣令大山綱良もと戰を起すに意なかりしが、此時、本支廳の官金十五万圓を支出して軍資に供したり。嗚呼、遂に此の激發ありたる所

以、既に激發して身を獻げて之に投與したる所以のもの、是れ西郷先生一偏の感化力による。

而して、先生の弟子たり、弟たり、子たるものにして、毅然として敵向し、「縦令ひ如何なる名義ありと雖ども王師に抗したるの名は到底免かる可からず」と。斷然、兵を進めて之れを殺し、巨眼、偉躰の人、岩崎谷の谷かげに倒るるとき、

官軍之を望み見て、きのふは陸軍大將と仰がれ、君の寵遇世の覺えたぐひなかりし英雄も、今日はあゑなく岩崎の山下露と消果て、移れば替る世の中の無常を深く感じつつ、無量の思ひ胸にみち、唯悄然と隊伍を整へ、目と目を見合す計なり、おりしもあれや吹下す城山松の夕嵐岩間にむすぶ谷水の非常の色も何となく、悲鳴するかと聞なされ、戎服の袖をぬらしそふらん。

に至りて、先生が他の一偏の感化力は、涙落ち腸ちぎるる凱旋將士が大義公分の上に顯昭せり。

偉ひなる哉、西郷先生、其の薫陶せし門弟子をして斷然として自己を討たしむるに至つて、敎化の力非凡なりしとを示す。

先生に從つて死するは尚易し、先生を殺して生くるは尤とも難し。而して、此の最難を遂げて肯て生存するの將士、今や異域に死の戰を爲しつゝあり。樺山、大山等奮つて曰く、今日ぞ即はち先生の志を遂ぐるの日なりと。先生、尚ほ生くると云ふべし。

夫れ、明治十年、薩摩の健兒に身を投げ與へたる西郷先生の情は、其かみ、清水寺の月照と相抱ひて、筑紫の海に入水せし情なり。人ありて冷然として曰く、此れ痴情なりと。嗚呼、痴なる哉、癡なるかな、何んぞ賢しこくして愚なる人の斯くは多きぞ。人生の事業、抑そも何するものぞ。石を積み、瓦を重ね、これ人の事業か。香水の名を薫じ、枯葦の腰を伸す、これ人の事業か。事業なるものは、其『人』にあつて存す、故に其の精神にあり、其の至誠にあり。もし滿腹の衷情を凝め、畢生の熱意を寄せ、此れ即はち死所也と斷じて實身を獻じなば、これ即はち其人の一生、其人の最後の事業、曰く、其人の死所にして即はち其の靈の活所にあらずや。花の事業は、微笑えむにある如く、滿開するにあり、滿開するにある如く、散るにあり、潔ぎよく散るも美也、散つて落ち塲を嫌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

はぬも美なり、花すべて謝し枯木ひとり立つも亦た美にあらずや。左らば、何んぞ、形骸の骨立し、土木の結成し、組織の編成するを見て初めて事業成れりと言んや。其の全心の凝る所ろ、即はち其終身の事業なり。先生。城山に死するも、毫も憾らみなし。

但だもし後學、一二の微言を挿はさみ、先生の弱點を知りて之に倣はざるは、即はち先生の所願にあらずや。惟へらく、先生の美所は、天と一躰たるにありて、其の弱點は亦た此に任せ過るの痕跡にあり。天に任せ過るとは、信念の厚きを言ふにあらずして、其のアキラメの餘りに早きにあり。故に、有形事業に於ける執着力の稍や淡泊に過るの形跡を存す。これ先生に在ては、則はち可、後學に於ては愼しんで戒しむべきの處とす。甲東、ひそかに惜しんで曰く、西郷を害せしものは、其の禪學なりと。若し、忍勉刻骨、執意、肉を徹するの甲東と比較せば、正に此の一異狀あり。之れ、先生の美所にして、亦た先生の弱所か。明治十年の事、亦た此に根づくと多し。此の見を以てせば、先生を惜む所ろなき能はざる也。人世の事、悲痛を極むるもの少なからぬ中に、明治十年の内亂に過ぐる、慘憺の事何處にありや。鹿兒島城山東北の高地に淨光妙寺あり。內に墓石累々として立ち、中央に遺跡をとゞめし一基の大石は、

西郷隆盛之墓

の六字を刻す。嗚呼、國詩人が歌ふべきもの、之に優る好題目いづこにかあらん。

勝田孫彌君が西郷隆盛傳は、本書第五卷を以て畢る。此卷の記事、尤とも暗陰、蓋し「未だ明記する能はざる事情」多きと、筆者同情の歎き、此に至りて傾盡するとに因る。何んぞ、其辭ばの一々辯證的にして、而して、其文の自から悲しきや。西郷を傳する、此傳の如く、情緻やかに心温たかきものは未だ曾てあらざりし也。

南北論

帝國の北方活動の地となるべく如く、久しき間だ見へつるに、何となく懸重するものある躰にて、墓々しからざりしこそ故ありけれ。今や、大勢一回し、方向轉然として改たまり

ぬ。帝國大活動の地は、之よりして其の南方となれり。自然の適應より言はゞ、北は修養の地にして、南は活動の地なり。北に活動するは難く、南に修養するは、適せざる也。とゝを以て、帝國の西南夙とに開け、東北之に後れ、近年、まさに此の東北に活動の氣運を引かんとせしが、天、此國民の運命を大きくして、今や忽ち之を一轉せり。北海道の開拓は、事業としては暫らく中止すべし。東北の開化は、文明の歩みに於て、自今、進みを遅くすべし。見よ、看よ、國民活動の大氣魄は、洪流の決するが如く、滿潮の押寄するが如く、大風の走るが如く、万馬の飛ぶが如き形勢にて、南方に展開猛進せん也。

風向轉ずれば、樹枝も亦た傾むかざるを得ず。東流の葦、すべて東に流れ、西岸の松すべて西に向ふを見れば、之より万衆億兆の心は、之を形はしたる諸種の事業と共に皆な南方に向はん。此時に方たりて、絶叫万呼すとも、北へ、北へと誘なはんとは、最早や難し。

左れど、南に活動するとき多きときは、北の修養を思ふと亦多かるべし。自から多きのみにおらす、多からしめざる可らざる也。南に往くもの、後しろに顧みるときは、即はち「北」なり。北や、之よりして「家」の紀念と相結ばん。之れ、自から修養の地たるに適するとを増す也。

益し、文質の配合は、國家の大事なり。國民大ひに南に動くの時は、亦大に北の感化を増さゞる可らず。北方は、之よりして、大いに修養の地たらしめずんばある可らず。

嗚呼、北海の野、廣茫千里なり。左れど、暫らく放擲せよ。之を鎖鑰として憂慮するなどは、抑そも末なり。國家の鎖鑰は、懸つて他の邊に存す。北方は、寧ろ家の如く、學校の如く、練修所の如く思へかし。開拓などは、當分中止して可なり。元來、北海の開拓は、未だ自然發達の地歩に向はざる也。但だ北海の水、大ひに用ふべし。其の水產事業のみは、有効且つ適當に行はるべければ、併せて茲に健兒海上の養錬を工夫し、隆んに北海氣象を煥發せしむべき也。

○きやうと

松山高吉君著はす所の「きやうと」二冊は、見て心地よく、讀んで樂しく、心氣のすが〳〵しくなる名著なり。表裝、挿畫、印刷、用紙、すべて優美。優美の內に、實用を滿たすをもて、且つ一入ほの味ひあり。もし只一點の遺憾を言はゞ、挿畫の題字に、英語を下にせずして、上にせしと是のみ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

岡山孤兒院を讀む

近頃「東洋基督教」と改題せし「岡山基督教」は、基督教諸雜誌中の神品なり。余は、之に掲載せられたる文章に、非凡の信仰と熱情とあるに打れ、太たく愛讀せり。中にも、主筆石田祐安氏の文には、一入注意せしが、今や此の人によりて書かれたる「岡山孤兒院」を受るに及んでは、初めより得ならぬ感情を懷き、肅然として卷を開きたり。實に其の文章の麗はしきとや。而して、十分の同情、溢るるばかり漲ぎり流る。此の筆を以て此の事を記す、文質兩ながら美、まことに近代の名著作たり。

第一章、岡山孤兒院の設立者を叙して云はく、

天眞、自然、有の儘、等の熟語は吾輩しば〳〵之を書に於て讀み、語に於て聞けりと雖も、これを有する活人は多く見ると能はず。然れども予は彼に於て初めて之を見たり。彼は時としては大人物の如く時としては頑是なき小兒の如く、時としては剛强不屈、而して時としては柔弱なる婦人の如く、其爲す所、行ふ所、言ふ所、思ふ所、坐する所、起つ所、飲む所、食ふ所、一として自然に出でざるはなく、自然の外は、ものうしと云はんばかりの有樣なり。而して他の諸々の秀美は實に此の天眞爛熳たる所より發するものなるを認めざるを得ざるなり。

彼の事物に接するや、冷にもあらず熱にもあらずといふが如きなまぬるき位置に止まると能はず、上らば天の極までも上るべく、下らば地の底までも下らざれば已まざるなり。

故に彼が一たび手を擧げ足を投ずるや、非常なる決意を以て眞直に突進するなり。之に反して、若し彼の心を動かすに足らざる事物に關しては、世人何如に騷ぎ立つるも彼に於ては全く關する所なきもの丶如し。故に彼の人を愛するや全力を以て愛し、人に說くや全力を以て說き、人の爲めに計るや全力を以て計るなり。

剛强なる意志と火の如き熱情を有する彼は、一方に於て甚だ溫順なる和德を有す、されば彼が自ら信ずる友人の忠言には耳を傾け心を開きて聽從すると、其友の男たり女たるを問はざるなり。

彼は實に此の如し、然れども人を知らんと欲せば、其の信ずるものを知らざるべからず、彼は云ふまでもなく宗教を奉ずるものなり、基督教を信ずる者なり。

彼は十八才にして天主教の信徒となれり、彼等は彼を愛せり、常に曰く予は天主教の宣教師を忘るゝ能はずと。然れども彼は深く新教の教會に感ずる所ありて、絕ち難き情愛を絕ちて、新教否寧ろ岡山基督教會に入れり。是れ實に明治十七年十一月二日即ち今を距ると滿十年前の事にして金森通倫氏か牧師の職に在りし時なりき。

彼の信仰は最も單純なり、彼が堅く且深く信ずる所のものは天の父と其攝理なり。彼はこれを信ずると云ふのみにては彼の信仰の度を示すに足らず、寧ろこれを目擊すると云ふを適當とす。此の信仰は彼の言に由て告白せられたるにあらずして、其の行爲に由て常に告白せらるゝを見るなり。予は此等の事に關して多言するを欲せず、何となれば、予の筆の徒らに形容に失せんとを恐るればなり。彼の事業は此の確信の唯一の證據なればなり。予は嘗て彼を大膽なる信仰家と評せり、ペテー氏も亦其著「石井十次君と岡山孤兒院」に於て Mr. Ishii is preeminently a man of fearless faith と記せり。彼は神學者にあらざるが故に素より神學を知らず。然れども彼の究めたる範圍に於て彼は誠に寬宏なり。彼の前には保守家も來りて親むべく、進步派も來りて語るべし。彼は神學に於ての宗教には局外中立の位置に立ちて、直ちに活ける宗教に接するなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

彼は聖書を愛讀し特に酷だ四福音書を嗜む、基督の行爲と教訓、其中に含蓄せられたる生命の泉は彼が沈思と實驗とに由て之を汲取るなり。彼が聖書中の眞瀧を解するや一種不思議なる解釋力を有するもの丶如く、而して彼は未だ註解書を讀みたるをなし。

彼の生命となる聖書の語は左の如し、

なんぢら我を選ばす我なんぢらを選べり、且爾曹をして往て實を結ばせ、其實を存しめんが爲め、また爾曹の凡て我名によりて父に求ふ所のものを彼をして爾曹に賜らせんが爲に我なんぢらを立たり……約翰傳十五〇十六、

なんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ、斯るものは何ぞかぞふるに足らん、……以賽亞書二、二十二、

神われを殺すとも我は神に依賴せん、唯われは吾道を彼の前に明にせんとす、約百記十三、十五、

聖書外の天の啓示として彼の生命となりたるものあり、左に示す孟子の語即ち是なり。

天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲所以動心忍性曾益其所不能

家庭に於る彼、朋友間に於る彼、其他諸の關係に於る彼を紹介せんとは此小册子のよくすべき所にあらず。

眞とに此の設立者は非凡の人物なり、潑溂たる英采、眉宇の間だに顯はれ、堅實にして熱烈なる心膽、其聲音にこもる。一と度び之れに接見するもの、敬重の念なきはあらじ。然れども、此の尋常ならぬ英骨は、靈の風水に沐浴して、更らに純化せり。彼が慨然として、あらゆる人間を賴みとせず、獨立獨行の眞の意義を、他の神聖なる形に於て顯はす所ろ、尤とも敬服すべし。歌ふて曰く、鼻より息氣をする人を、決して賴むとなかれ、と。此れ石井君獨立獨行の氣慨なり。夫れ、神學の動搖、教勢の不振など、世論の憂慮騷がしからぬにはあらねど、抑そも之に影響せらる可き實際の結果は、何程の事ぞ。苟くも、靈界に生息し、直接、天父の聖氣に感通せるものは、疑はんと欲して疑ふ可らず、去らんとして去る可らず、天下父なきの國あらずんば父を棄て丶行くべきの地あらざるが如く、天の靈父より離れて夫れ何處に行んや。石井君の如きは、毫も宗教界の盛衰に影響せられざる人也。此書の筆者は、左の如く記せり。

彼は普通の意味に於ての天父の實在と其の攝理とを信ずるのみにあらず、彼と天父との親密なるは、言語を以て形容すると能はざるものあるが如し。彼曰く、たとひ全世界の人、予が主義に反對して孤兒院を棄つるも、予に於ては毫も痛痒を感ぜず、何となれば地もし同情を表せずんば、天必らずマナを降らすべく、此輩もし默止せば石叫ぶべければ也。

彼は天父の救と助けとを唯一の土臺となし、凛乎として此の上に立てり。斯くして、彼は既往滿七年七ヶ月間を送りしが

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

如何なる經驗をなせしか、近ごろ嚴然色を正しくして、既往七八年間に於ける天父の無限恩愛と全世界の同胞の熱き同情とは深く予が骨髓に徹し誠に感謝に言葉なし然れども予は非常の眞理を發見せり何ぞや寄附金を以て彼等を養育するは物質的に彼等を救ひ而して精神的に彼等を殺すの阿片劑を與ふる也と。

言ひ、乃ち決然、憲法を改正すらく、

天父の冥助と院內各自の勞働とに由つて之を維持擴張し敢て寄附金品を受けず。

此如き改正は、素より人を賴みてにあらざれは、其の事業の發達せしを賴みてにもあらざるべし。單に天父に委賴せる生平の確信によれると明白なり。岡山孤兒院が、其確信によつて寄附金品を受けじと定めたるは、即ち其分ならん。但だ天下之を聞きたる同情の士が、「左らば、何事か維持すべき方法の他にあるが故ならん」と信じ、此の信によりて安んぜんとするは、此の上なき冷淡なりと言はざる可らず。彼の信じて安んずるは、其道なり。天下の人士が之に安んずるは、其の義にあらざる也。幸はひに、此書を讀んで、彼が大決心の基礎を知り、彼が生平の意氣に感じたらんものは、今後彼が何如にして、二百六十餘名の孤兒を教養するかの一事に憂慮して止む時なかるべき筈也。

余が信ずる所によれば、岡山孤兒院が現に爲しつゝある諸部の實業は、二百六十餘名の孤兒を教養するに足るべき利益を供出するに足らざるべし。故に余は石井君が此事業と其收入とに委賴したるにあらざることを固く信ず。惟ふに、石井君、現在の經綸には、確としたる收入の賴みにすべきもの絕えて無かるべしと信ず。石井君が唯一の信仰は、依然として天父の上にあるべし。將來事業の上に委賴せざることは、從來寄附金品に委賴せざりしと同樣なるべし。但し、何如なる天惠の與へられ、何如なる特殊の方法ありて、今後の岡山孤兒院は維持せらるべきか、此の解釋は、宗教界、現社會の二つ乍らを驚倒せしむべき新異の事例に存せんことを信ず。茲に余が讀者に警告して止まざる所のものは、深く此の解釋に注意し、仔細に岡山孤兒院の情狀に掛念し、靈界の一問題として彼我共に其責を負ひ、斷えず、十分なる同情と覺悟とを懷抱せらるべしと言ふこと、これ也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外傳道論

宗教界の活氣は其の傳道にあり。而して、傳道の精華は、外國に對する傳道にある也。

習慣、利害を異にせる異邦の外國人民に對し、其の靈魂の救はれんことを希圖して、之が爲めに生命を捐る迄に至るは、人心の最とも偉大高貴なるものに非ずや。

故に、傳道の絕頂は、外國に對する傳道に存す。登つて玆に達せざれば、未だ以て傳道事業の最高理想に近けりとは云ふべからず。

善事は須からく家に於て始まるべし、然れども、家に於て留むべきものにあらず。一家に於ける傳道悉とく成就せざるが故に、乃ち未だ家外に施こすべからずと言ふものあらば、其の謹愼は稍や可なるも、其の博愛は薄しとせざる可らず。然れど、一人にして、家の內外に從事するに當りては、寧ろ情に恕すべきものあり、先づ家內の事に於て悉とく成就せんと言ふや、或は可なり。但だ夫れ、家を出でて、公衆普通の傳道に從事するものが、國內の事未だ全く畢らず、故に未だ國外に施こす可らずと言ふに至ては、何如にも奇怪なり。

傳道者が公共の傳道事業に對するや、普通共同の責任を有す。當に分勞して各自に諸面の方向に擔任すべし。即はち、傳道事業は、一大組織なるが故に、もろ〳〵の機關を分擔するに於て、互ひに相ひ補益すべし。單に、一箇の方面を必要なりとして他の方面に向はんとするを妨たぐることあるべからず。況んや、其の尤とも緊要、尤とも高貴にして、影響感化の至大至重なるものに於てをや。外國に對する傳道は、即はちこれ也。

外國に對する傳道事業の始めて起らんとするや、常に同一の反對論を惹起す、曰く、內國の事未だ足らず、施こして外に用うべき餘力少なし、若かず、全力を國內に集め、大に鬱勃するを待つて而して後ち外に發展せんと。この反對論の起るや、古今東西同一轍なり。基督敎も、佛敎も、英米に於ても、我國に於ても、常に斯の如し。

凡そ大事を誤まるは、俗論にあり。俗論の大事を誤まるは、其の尤ともらしきが故にあり。尤ともらしき不尤もの淺薄なる論議は、眞とに議論中の僞善者なり。其の怖るべきは、眛

面のしかつめらしき所ろに存す。

ヒリップ、ブルックス、嘗て此種の輩儕を論じて曰く、茲にボストンにも異教徒あり、茲に亞米利加にも不信者あり、吾等先づ彼等を改悔せしめて而して後ち支那に行かんと言ふものあるは、吾等が數々耳にする所ろ也、國內に於ける吾が基督敎の不十分をあげて、國外に事を爲さじとする惰弱の言ひ譯となす、恥辱之に過ぎたるものあらんや、此の恥辱の大なるは、宛がら恥ぢざるの恥辱の如し、其の怠りと罪とを楯にして放縱と不埒との辨解とす、たとへば父を殺したる罪を容されんとて、判官よ、吾が孤兒となれるに同情を與へよと言ふが如し、と。

如斯き輩儕は、先づ國內に熱盡せんと言ふを常とす。熱盡するは、固より可なり。然れども、國外に力を用ふるが故に、國內に盡すべき力を減ずべしと思惟するは、迂にあらずんば、怯なり。人情の發慣は、冷々たる數の道理を以て判定すべからず。外に施こすべき力を收めて內に轉用し、以て內に盡す可き力を倍加せんと言ふは、畢竟、人の意義、精神を知らざるもの也。故に、之を迂と言ふ。大事、起らんとするや、乍ち苦慮し、將に戰端を開かんとするの機に臨んで、修養足らずなど言ふは、臆病ものの癖なり。故に、之を怯と言ふ。嗚呼、古來、此種俗論の大事を破れるとや、夥し。折角に膨脹せんずる芽を摘み去り、既に芽出したる蕾を害なひ、遂に滿開爛熳の壯觀を呈せしむるとなし。風雨、未だ花に敵せざるに、害邪、すでに花底より發す。春天の恨みは、必らずしも、雨にあらず、風にあらず。

夫れ、先以て國內に熱盡せんと言へる、其の如斯く言ひ出すに至りし一言すら、亦是れ外國傳道論が生起せし影響にはあらずや。單に論議の影響すら既に如斯し。況んや、實際に着手し、身を獻げて海外異邦の救濟に努力するもの起るに至らば、及ぼして國內に影響する所ろ、知るべき也。所云る國內を振起し、內地の傳道を擴張するの道は、寧ろ此に存するとを知らずや。

試ろみに、政海の事例に鑑せよ。明治六年、征韓論の起るや、內治未だ修まらざるを以て之を不可とするものあり。然れども、此の尤ともらしく着實らしき政治論は、二十餘年を經るも尙ほ實効を奏せず。此間だ、同胞を殺し、國才を枯らし、

大に元氣を喪はせ、内治甚しく亂れたるの外、何等の甲斐もなかりき。然るに、一朝事起り、天、已事を得ざるの機勢に突き出し、幸にして我國政事家の猛決を促がせしの今日、万民皆な自己の力量の意外なるに驚ろくにあらずや。人の奮慨は大率ね如斯し。就中、日本人民の氣力は、則はち尤とも斯の如し。

左れば、俗論に區々として、之に拘らふとなかれ。俗論の俗たるとは、直ちに知らる。此の知らるべき俗論に促へられて以て躊躇するは、即はち亦た一種の俗にあらずや。政界の事は、尙ほ説あるべし、傳道の事に至ては、遲疑すべき由緣、何處にかあらん。

凡そ、宗敎界の傳道者は、政治界の遠征者に先だつを常とす。僧侶が山を開き、宣敎師が領事に先んずるもの、即はち是れ也。左るを、帝師大に動きて、朝鮮國の獨立に戰かひ、又、鮮血を流して、新らしき占領地を收めたるの今日、尙ほ以て海外傳道の是非を喋々して止まざるが如きは、何事ぞ。

勅宣に之れ有り、朝鮮國は、我帝國が以て扶助し、以て啓導せざる可らざるものなり。他日もし占領地を帝國永遠の屬地となさば、これ東洋平安の爲めなり、其民以て敎えざる可らず、以て化せざる可らず。是れ、既に明白の事にあらずや。此の明白の事あるに際して、尙ほ傳道の是非を言ふ。抑そも傳道なるものは、何事の言ぞや。

議者ありて、朝鮮人民及び占領地人民の醜態蠻狀を説き、以て傳道俄に施こす可らずと言ふ。あゝ、如斯き人士の傳道とは、抑そも何如なる事ぞ。裳を着せんとせば、王宮にゆくべし、麗はしく語らんとせば、講壇に登るべし。人の靈魂を救ひ、其智德を高め、之を啓發し、之を敎化せんとするに於て、何んぞ蠻醜の故によつて望みなしと言ふべき。帝國の政治は、此等人民の上に化を施こしつゝあり。夫れ、政治にして既に着手すべき時、傳道は未だ着手すべからずとは、何等の意義ぞ。某氏、かつて贅澤傳道の語を用ふ。傳道の贅澤なると、此の輩儕が言ふ所の如きはあらじ。

聞く所によれば、在京有志者中、朝鮮傳道の視察の爲に渡行したるものありと。夫れ、傳道爲すべきものか爲す可らざるかは、視察を待つて初めて決すべきものにあらず、何となれば、傳道は、時を得るも得ざるも、必らずや施こさゞる可ら

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ざる耳ならず、朝鮮に對して現在の地歩に立てる帝國の宗敎家たるものは、是非とも傳道の責任を擔當すべき義務あるが故也。左れば、其視察は、傳道の爲すべきか否やの爲にあらずして、何如なる方法に於て爲すべきやの方案を決するが爲めなるべし。

帝國に渡來せる外國宣敎師に對しては、無厭慮に批評したり。然れども、此の無厭慮の批評を蒙りつゝ、恬として傳道しつつある外國人、及び、之を送來せし外國の有志者が精神は感服すべきものある也。帝國の宗敎徒は、今や自から實行すべき機會に際せり。批評せしものは、之より實行せざる可らず。抱負、尤とも謹嚴ならざる可らず。

吾人が見て傳道となす所ろのものは、極めて宏濶なり。其の意義、聞ま世上の解釋と同じからざるものあるが如し。然れども、凡そ、道を傳え、敎を植ゑ、基督の御心を實地に立つるの事業に於て、施こして之を國外に行はんとするの有志あらば、これ則はち吾人の同志なり。吾人は、夙に之に熱賛を寄せんとするもの也。

隨感

○月下櫻樹のかげ

或る夜、ふと迷ひ出でて、月下、櫻樹の下にたゝずむ。白雲近くによやかに棚引き、影、朦朧として地上に畫がく。村家、戸ごとに寢ねて、人跡たえ、風籟全たく絶して、偶ま、花片一二の散るあるを見るのみ。

何心もなく只だながめて、つくづくと花の影を打見やれば、月、雲を破つて現われ出で、艶なる姿を示さんとや、花の色まばゆき迄に照り添わりたり。玆に於てか、人影あざやかに黑く、天地間、たゞ、月と、花と、吾と、吾影とのみあるとを知れり。

月は、光を垂れて、木梢に降り、花は、姿を開きて、吾前に踴る。吾は、身動きもせず見てあれば、吾友なる吾影子も亦た、まんぢりともせず眺めつゝある也。

次第に意氣の感通するとを覺え、次第に彼我のけぢめを忘れ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

次第に有無相同じて、遂に渾然として一となるとを覺えたり。月、ほゝえみて下に臨めば、花、はぢらひて之に應ず。吾と吾友とは、莞爾として立てり。而して、言なきに互ひに覺り、聲なきに相ひ聞こゆ。天地は最とさびしくして、にぎやかに、吾は忽まち最大富豪の心地となれり。

時に、徐むろに、靜かに思ひけるやうは、彼の漠々たる浮きたる雲なかつせば、此の明晃々たる月を生み出すとなかりつらん。爛熳たる彼の花は、半死の枝より產れ、枝は幹と共に足下の此の黑き土より生れしか。吾なくんば、此の影なし。見よ、吾動けば彼動く。見よ〳〵、吾麾まねけば彼も亦た麾まねくなり。影や、既に心あり、吾をながめて、何如にか思ふらん。影よ〳〵、いざ共に語らん。則はち進めば、彼退ぞく。影よ〳〵隱れ玉ふとなかれ。

狂ふ斗りに追へども、影は遂に吾を避けたり。吾再たび樹蔭に返りて、又つく〴〵と靜思默想す。散り來たる花一ひらを木梢の使ひと聞きて、仰ぎて、則はち語るらく、花よ〳〵、いざ御身と語らん。古來たゞ詩人のあるありて御身と語れば、世俗は之を「歌」と云ふ。詩人御身が情感を代つて言へば、人は之を「想像」と云ふ。聞き玉へ、御身に心ありと言へば、パンセイズムと云ふ。イズムか、リズムか、そは世の人の狹き議論の爲めに入用ならめ。吾と御身と相對し、如斯く懇ごろに、如斯く親しく相語らんに、何んぞ此の間だに研究批評の理解を要せんや。われは、御身が氣高くして、潔よきに服す。御身は、よくも斯く無言の德を守らるる哉。而して、決然として散り玉ふとの如何に潔白なるや。御身は、よひどれが手折らんとするを拒み玉わず、子供が戯むるるを輕んじ玉わず、武士が鎧の袖にも散り、農夫が香よからぬ糞汁の内にも散り、乞食をも西行をも同じとして下に眠らせ玉ふ。試ろみに御身に問ふ、御身は、其都度に異なりたる感情を持ち玉ふか。持ち玉はぬか。花よ〳〵、花の姬よ、花の殿よ、花の子よ、花の妻よ、花よ〳〵、いざ御身に問わん。

あゝ〳〵答へ玉はぬこそ御身が德なれ、暸解したり花の友よ。左れば、彼の明晃々たる天上の月に對しても、御身と均しく、答へを要めはせじ。左り乍ら、何如にも麗わしき月の君かな。左程に麗わしき姿を持ち玉ひながら、黑雲の蔽ふときも、雨のくらますときも、風の砂を散らすときも、木の葉の

殺風景に過ぎるときも、毫も怨み玉ふ景色は見えず。孤厂一聲鳴き渡るときの君が情けは、露の涙を落し、人を思ふ夜深しの窓には、影をうつして慰さめてをとづれ、幽谷の猿猴にも天のながめを示し、水中の魚にも錦の織物を被ひ玉ふ。千門万戸みな君が姿を拜し、万戸千代おの〳〵君に訴ふ所ろあり、而して、君は毫も變り玉ふとなし。如何にも、優しき、君の御心かな。何とて斯くはもてなし玉ふ。

思ひに沈める吾が心や、感情切まりて欷々として泣く。扨ても、淺はかなるは、世の中の學者てふものよ。何如なれば、斯る親しき天地の交わりを棄て、斯る明らけき誠とをよそにして、敢て好んで冷々として理窟をのみ辨ぜんとはするぞ。理窟とは、道理の謂ひならじ。物の本相を後にして、形式言語の間だに區々として執迷し、徒らに天地を小さく切り刻みて、太觀一視の樂しみに入るとなし。われは、諸君を恨むにはあらず、諸君が此樂しみに入り玉はざるを惜しむ也。

月の君は、幾度か斯る人の窓よりさしこみ、其の頑なる心を慰さめんとせり。花の姫も、あまたゝび姿を示して、風流の思ひを引かんとせり。而して、彼等は大率ね冷々たるとを止めざりし也。

吾、むくつけきもの、何の縁ありて今夜、此の樂しみを許されたる。花ねむり、月かくれて、影の消ゆる時、獨り心を温たかにして歸る。

○日蓮上人

日蓮上人、釋尊の御使をもて自任し、法華經を宣傳して、天下を敵とするとを恐れず。北條氏、執權職の威力をもて之を壓服せんとせしが、遂にまた之に佞するの外あらざりき。劒戟も之を斷るを能わず、流島も之を沒すると能はず、證ずる所ろ之を鎌倉のやしきに請じて、「聖人は誠とに末代ありがたき名僧なり、殊に其魂のゆるがぬは英雄も遠く及ばざるべし、流石がに佛の使なりと云はるる程ありて、堅固なる事どもなり」と只管らに感賞せざるを得ず。遂に宗門弘通の定牒を渡して曰らく、

頃年あまた眞法の威力御感最とも深し三國比類なき妙宗後代に得がたき尊僧いづれの宗か之に比せん日本國中宗門を弘むる事其妨げあるべからず。

日蓮、此狀を得て長歎すらく、多年我言を用ゐずして今日初めて此沙汰あるは、唯だ表面のみ、實は我大法に諂へる耳、我三たび天下を諫めて用ひられず、今は正に身を退くべきの時なりと。則はち、宗門弘通の事を法弟等に托し、甲州身延山に隱遁せり。それ、正を立てゝ、國を安くするは、彼が傳道の第一義なり。宗門によつて人心を一和し、以て國難を外に迎ふるは、彼が大經綸なり。宜べなるかな、其の蒙古來を預言し、異日、海外傳道の第一着手を、其法弟中より催ふさしめたるとや。而して、偉大なる彼が硬骨と、其の超越せる靈心とを示すものは、彼が時賴の事實に於ける降服を見て、則はち忽然として寒山僻陬に退隱したるの一斷にあり。

○法界の菴室

日蓮の身延山に隱るゝや、四山四川の間だ、手の掌ほどの平地に於てす。晝は日を見ず、夜は月を拜せず、冬は雪深く、夏は草茂り、訪ふ人稀にして道を踏分くるとすら難し。玆に菴室を結び、天の雨をのがれ、木の皮をはいて四壁とし、自から死たる鹿の皮を衣とし、夏は蕨を折て身を養ない、冬は茸を取て命を支ふ。弘安三年正月自から認ためたる文に言ふ、去年十二月より雪降り積り、改年の正月、今に絕ゆるとなし、菴室は七尺、雪は一丈、四壁は氷を板敷とし、中には雪を米と積む、もとより人來らぬ上、雪深く道塞がつて問ふ人もなし現在には八寒地獄を我身に感じ、生ながら佛にはならずして寒苦鳥と申す鳥とはなれり、頭は剃ことなければ鶉の如く、衣は氷に閉ぢられ、鴛鴦の羽を氷の結べるが如し、かゝる所ろに古へ睦びし人も問はず、弟子等にも捨られて候つるを、御器を給ひて雪を盛りて飯と觀じ、水を飲て漿と思ふ、と。かくして、法華經を讀誦すると九年、心に本門を形わし、軀に戒壇を生かし、渾身すべて、法界の華嚴となる。道に忠、法に信なると如此きは、豈に宗敎界の大聖人にあらずや。夫れ、宗敎に重んずべき。靈界の生命にあり。此の生命、發して實行となり、修めて鍛煉となる。故にもし生ける勤行あらずんば、千百の麗はしき說法と、巨細周密の論理とありと云と雖ども未以て尊しとなす可らず。左れば、誰か、基督敎の神學を提げて、佛敎の敎理と比較せんとはする。敎理、神學の比較は、學問上の事業なるのみ。もし未だ顯地に、鍛煉實

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

行の工夫を踐まざるものは、則はち眞とに優劣の品等を知ると能わざる也。輕々しく、佛教を難ずる者よ。汝一度び道に忠、法に信なるヽと日蓮の如くならざるうちは、未だ只だ其の論理によつて優勝の地歩を得たりと思惟す可らざる也。

○乙女と農夫

乙女、小さき籠を携さえて、緑一面の麥の圃を行く。龍神の姫の御使、青海原を渡るが如し。農夫、朴々乎として犂をかたげて來りしが、自から路を避けて、踵がへつて目送しつゝ佇ずめり。わが子の爲めに羨やむか、はた失なひし子を憶ひ起すか。乙女は最と無心に歩みしが、はたと蹶づきて倒れたり。農夫は、あと叫びて、兩手をひろげたり。左れど、乙女は其まゝ跪まづきて、何やらん打伏す躰なれば、すみれは眼こを大きくし、口を開らひて、首を動かして語るなり。麥はざわ〳〵として推あひて窺きうかゞふ。農夫も思はず、足をつまだてたり。來かゝりて亦た止まりし女は、彼が妻か。彼と相見て、一と度びほゝえみて、忽まち兩々双眼に涙の浮ぶは何故ぞ。暮にいそぐ烏鳴き渡る。櫻の花、風に散らんとす。

○遠見の氣樂さ

川の流るるを望めば、白き糸の走るが如し。煙の昇るを見れば、龍の勇み躍るが如し。自轉車の廻るを眺むれば、油の上をすべるが如し。何ものも、遠く望み見るときは、惣べて、自由なり、氣樂なり、何の苦もなげなり。

○樹紋は面皺の如し

横さまに樹幹を截つて、斷面の木理を視れば、線環重なりめぐつて層々とも〳〵連なる。毎環、おの〳〵白處あり、色處あり、やうやく淡く、やうやく濃き、たとへば、朝たあり、暮あり、即はち一日と云へるものの如し。其の淡色の處は、軟らかなり、年を以て言わば、春夏の頃、養液さかむに通ひて、樹質の大ひに成增せし時節に當る、故に其巾や廣ろし。濃色の處は、硬たし、年を以て言わば、秋冬の頃、液路全たく枯れて、樹質量を增さず、たゞ皮革を嚴めしくして以て恆寒の襲ひ犯すを防ぎし時か、故に其巾や極めて狹まし。審びらかに此の形跡によりて、當日の歲時を推考せば、此處に春

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ありき、彼處に冬ありきと知りて、以て樹運一歳の榮枯の徴を覺るを得べし。若し夫れ、烈冬の時節、葉落ち、枝枯れて半死の狀なるを、寒風嚴霜倘更らに之を苦しめて、毫も憫れむとなし、陽春三月、花開き、蝶飛んで、香氣十里に馥郁するの榮華に比ぶれば、樹木そも〳〵何の咎ありて益もなく冬天の無情にあわんとするやを疑がふべし。左れど、此の嚴酷あるによつて、彼の硬骨あり、樹質之が爲めに固熟して以て長材大幹を支持するに足るとを惟ふときは、木理層々の斷面に向ひ、濃色薄肉の環線に對して、當年失意の形跡に感謝せざるを得ず。

つら〳〵辛酸多年の長者にむかひて、憂ひを刻みし眉間の皺、腦漿を沸かせし頭髮の白きを見れば、天、幾度か艱難を下して故さらに之を苦しめ、數々逆境失意に處せしめて以て大任に堪ゆ可き大硬骨を造り上げたる紀念ぞとは知らる。

○自から愛敬の情あり

福地源一郎君、故三條相國を評するの言に曰く、公の風采と云ひ言語と云ひ、余は常に公を拜せる毎に、愛敬の情自から出でゝ其何故たるやを知らざる程にてありき。然るに一日、……往時の物語を三時間餘なし玉ひて、懷舊の情にたへ兼させてや、眼中に涙を浮べさせられたり、余も公の意中を察し奉り、公が當時の困阨の場合を察し奉りて、覺えず落涙に及び、黃昏まで往時の談をなしたる事ありき。此時に於て、公が誠忠正實の大賢たると、余が頭腦に強感し、彼の前に公を見る毎に愛敬の情を發したるは、即ち此の感動なりしとを知り得たり、と。世故に經歷して、人を觀るとの多かりし福知君の如きは、心術と相形との反映する秘密を、好く直覺せらるるものと見えたり。

○識らず相侵す

盲人、杖を牽き、そろ〳〵來かゝりて、快ちよげに居眠りせる犬の尾を踏む、犬、驚ろき覺め、吠え立ち、吠えかゝる。盲人、激として怒り、杖を揮つて滅他に打ち、赫として睨む獨語罵しつて曰く、キサマ等に馬鹿にさるるものか。犬も、倘ほ吠ゆるとを止まず。盲人も罵しるとを止めず。吠ゆれども、辨ずる能わず、睨めども、察しがたきぞ哀れなれ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

近松門左女氣質

（一）　帝國文學

『帝國文學』第四號の開卷第一に、「巢林子の女性」と題する、高齋林芃氏の論說あり。

抑も林芃氏とは、一昨年の六月、第二高等中學校尙志會の雜誌開刊初號に於て、「近松戲曲に於ける女子の性格を論ず」てふ一文を掲載せしめたる樗牛子にはあらずや。樗牛子の初めて文界に入るや、此文を以てし、其の東都帝國の文學に飛揚せんとするや、亦た先づ彼文を以てす。聞くならく、此の君、巢林子の戲曲に於て精通至らざるなく、其の人物評をもて尤とも得意とせらると。然るに、巢林子の戲曲は、男性に於けるよりも、女性に於ける方、多樣の人物あり、故に亦多樣の趣味あり。其「人」を描くや、寧ろ、女性に於て優れたりとせらるる時、君は則はち此に向つて筆を下す。其の抱負察すべき也。

曩に尙志會雜誌に於て、君が批評の精細なるに感じ、今は帝國文學に於て、君が文の巧妙なるを感ず。若し、夫れ、辭の麗わしきと結搆の整のひたるとを以てせば、今文の遙かに先文に優るヿを知れり。されど、同情の若々しくして温たかき、詩想の颯として鮮新なるを求めんとせば、寧ろ當年の樗牛子に於て與せんとす。況んや、彼時に於て、既に穩やかならず見えし着眼の、此度は更に擴張し、今は殆んど受取りがたき迄の見識を成定せられたるに於て、反つて大いに憾みなきヿを得ざるに於てをや。

われは、小金井に半ば散りし櫻を惜しみ、俄に急行して仙台城東に一友を訪へり。みち〳〵窓眼より眺めて、連山の徐むろに起伏するに樂しみ、白河の關に到りて、滿開の花を迎へ、仙台に達して、蕾のやうやく開かんとするを見たり。老櫻は哀れなり、盛花は既に衰ろへに就く、ひとり蕾の之より微笑まんとするこそ、優にやさしきもの哉。われは、此の車中に於て、同行の山月子と同もに帝國文學を讀みつる也。

林芃氏曰く、愛の詩人なる近松は亦た女性の詩人なり。愛情

は女性によりて最とも多く發揮せらるるものなれば也。彼は愛を以て女子の本性と爲し、之に配するに名譽心を以てせり、と。

此の『名譽心』の稱え、甚はだ穩やかならず。氏は、女性の名譽心を以て、消極的なりとし、「只だ他より惡く言はれざらんとする意思」なりとせり。而して、「女子を殺すものは、愛情のみならず、名譽心亦之を能くす」と言ひて、斯る名譽心が「愛」の情に匹敵するほどの勢力を有すと見做し、而して、巣林子は「愛」の特性を共に此の特性をうつせりとて、「宵庚申」のお千代、をあげて之が例證となせり。

凡そ、人として名譽心なきはあらじ。人にして感情の鋭敏なる女性が、他の評判を氣にして、其の名譽を構ふとのあらんは、言ふ迄もなけれど、之を女の特性なりとし、而も、巣林子が、此の特性を描寫せりと言ふに至りては、甚はだ受取がたし。

名譽心は、男兒のものなり。名の爲めに死するは、之れ、丈夫の意氣地にして、女性に於て反つて稀なりとす。女性にしてもし名譽の爲めに死ぬる斗りの事をせば、之を女の男氣と言ふ、其の特性にあらざるを見るべし。固より、氣の狹まきは、女の癖なり。些細なる粗率に、人の惡評うけ、之に得堪えずして、剃刀を倒さまにするものはあれど、巣林子が描寫せる女性に於ては、取分けて斯る行作に陷いりしものは至つて少なし。况んや、かの「お千代」に於てをや。

士は己を知るものの爲に死し、女は己を愛するものの爲に飾る。此の飾るを以て名譽心なりとせば、女ほど名譽心に富めるものはあらざるべし。左れど、何人と雖ども、此に名けて名譽心の稱えを與ふるとなからん。天下万人の誹りをうけ、八方世界に顏のむけ所ろなしとも、郎一人の心だに變らずば、王侯貴人の譽れよりも、金殿玉樓の住ひよりも、大千世界の世の中よりも、尙ほ廣ろく、尙ほ住みよく、尙ほ嬉しく思ふが女の心なり。故に、藤の未だ松に纏はざるや、何如にも弱けれども、一たん倚所を得て、畢生の身を托するや、強きと松よりも強よし。故に、女は弱はし、左れど母は強よしと古人の言ひしは、乙女は弱はし、左れど、妻は強よしの心とも見るべし。既に、心を許して、情を通ずるや、世上の評判に顧慮せざると、女の如く甚たしきはなし。もし顧慮する

とありとせば、郎が爲め也、郎が爲めにあらずんば、親の爲め也。此時何の暇まあつて名譽心の爲めに顧慮せんや。左れど、天性、名譽心に驅られ易き男子は、此に至て、其の弱點を露はし、兎角に世間の思惑を憂ひて、躊躇して決せず。此時や「男氣」の淺々しきを怨まれて、女の大膽不敵なるに恐れ、五尺の身を以て、女の髮の毛に引かれ、一顧、一進、想はず、遂に世間の義理を破却するを例とす。

「お千代」に對する濃やかなる同情は、林叟氏が此文詩趣の絶頂なり。實にも、お千代や「二度び其の夫に見え、生離、死別、幾度か其棲を變て、而も其居を安ずる能はず」。哀れむべきは、老櫻が三たび目に咲く色なり。彼女は、世の流轉に經驗し、人事のあぢきなき苦味を嘗めたり。もとより、三度び男子を易えたるものは、乙女らしき羞恥と、遊び女の熱情とは有もちがたきもの也。左れど、之れによりて「彼女の半兵衞に於ける、愛せざりしに非ず、實に愛するの力なかりし也、半兵衞の愛を維持せんが爲には、出來得る丈けの力を盡したるべきと素より論なし、されば之れ素と半兵衞に對する眞摯なる愛情より出しに非ずして、只だ夫の愛によりて夫妻の關係を固うするにありし」と見做し、たゞ去られじとの望みにて、半兵衞に仕へ、遂に去られて不名譽を買ふとの堪へがたきによつて之と心中せりと言ふに至りては、「お千代」に對する無情此上なき判决なり。「お千代」もし靈あらば、潸然として林叟氏が邪推に泣き、其の誠の知れざるを口惜しく思ひ、半兵衞までが斯く思はんとや、夫を第一に苦にするなるべし。二度び去られたる女が、去らるるとを何よりも懼るるは、言ふ迄もなし。愛の衷には懼れなきものを、彼女が此の危懼の心は、多少、其の愛情を蝕はみしならめ。幾度か情熱し、幾度か若やぎ、半生の不幸を忘れて、郎が熱愛の電氣に打たるるの折々も、姑が邪見に未來の衝突を想像して、俄然として「去」の一字を念ひ起せるとはあらめ。左れど、危懼の心は、倚賴の心を生む。倚賴の心は、俠氣の由て憫れむ所也。男氣ある半兵衞にして、妻が過ぎ去りし不幸を寢もの語りに聞き、危懼し委賴する憶しがちの「いぢらしさ」を見ては、不愍の情、佳愛の情、豈に熱せざるを得ん。況んや、半兵衞、義理ある養母の剛慾に、「半日、心を伸すともなく、死なうとせしと以上五度、恨みあるなかに」お千代に緣組み、切ての憂を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

はらせしもの、熱愛のほど左こそと思はる。夫れ、何如なる夫にても、夫の熱愛は忘れがたきもの、夫に熱愛せられて、之に情を開かざる女性は、怪物なり。優しうして、世の不幸にもまれたるお千代が、心の感謝察すべき也。男もよく、男氣もあり、孝心深く、なさけ、濃やかなる半兵衞に連そひ、而も腹に五ヶ月の種を宿して、憫れむべし、絶躰、絶命、運つき、命つきて、共に心中すればとて、愛の爲にせず、名譽の爲に、死にたりと言はんは、何如に情けなき見解ぞや。

庚申の宵、東大寺大佛殿の勸進所に於て、生前、改名を定めて、半死の回向を爲し、最期を爰と定め寄り、望みありやと半兵衞の問ふあれば、「なふ死ぬる身に何の望み、水の中、火の中でも、先の世迄も此方樣と夫婦になつて居る所を、見立てて死んで下さんせ」と。あゝ、是れ「千代」が本願にあらずや。もし之に「名譽」の二字を手むけるものあらば、楓樂良訓信女は、虛空にさまよひて、成佛せじ。多情の詩人、乞ふ言ばを更えよ。

林艮氏は、亦た「不注意」を以て、女が特性の一となせり。誰か、女性を以て、不注意となす。「注意」は、これ、女の特性

にあらずや。もし淺はかなりと言はゝ、可なり、之を深智乏しきによりてと言はん。もし、狂ひて無頓着なりと言はば、可なり、之を熱愛の故によりてと言はん。左れど、不注意即はち、ケアレッスネスを以て之に配し、「出世瀧德」の吾妻、「槍權三重帷子」のおさい、を擧て之が例證となすに至りては服すると能はず。

熱情は、針小の事を棒大にし、棒大の事を針小にす。其の眼識の異常なるは、感情の熱するが爲めに由る。之を狂へりと言ふとを得るも、之を不注意なりと言ふ可らず。實は、注意を過し、情感を激したるの故によるのみ。其、愛の爲めに、何事をも忘却し、世間の評判も、人の誹りも、世の習慣も、お上の政道をも頓着せざるに至るは、即はち、其熱愛の故による。之を不注意とは言ふ可らず。左れど、強ひてもし之を不注意と言はば、此の不注意らしき無頓着は、只だ愛の爲による耳。夫れ愛の爲に、斯の如く無頓着なり、これ前段に女性に名譽心なしと言へる所以の反面の理なり。

「吾妻」の所爲は、無頓着なり。されど、此は「死身と胴を据へたる」后の無頓着なり。此の無頓着や、女にあつては、郞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を愛し、郎の爲めに何事にてもなさんとする熱愛より來り、男にありては、名を重んじ、義を重んずる激氣より來る。新七が、手代惣兵衞の罵しるに辛棒出來ず、目前の大事を忘れて、切てくれふと飛で出るとき、「無念を堪へてお爲になり、親旦那樣の御恩を、送る心はないかいの、其樣に短氣では、私や心元ない」と恥しめたる、女房お半は、寧ろ大なる注意を與へしにあらずや。注意の沒すると見はるるとは、男女兩性、激熱の所發に由る。

「おさい」に至ては、一種複雜の特質あり。其の夜間美少年を數寄屋に引入れたるを以て、直ちに女性の不注意に歸すべからず。前號、少しく此夜の消息をうかゞひたるものあり。余は「おさい」に許すに一種の才を以てせん。巣林子は、不注意氣質を描かんとて、此の才女を寫したるにはあらじ。

夫れ、巣林子が主として描く所は、義理人情の衝突、意外存外の命運にあり。彼は、旨として、此の筋を通し、人外一種の運命ありて人を左右し、人は意はぬ誘引に驅られて存じ寄らぬ行爲、最期を遂ぐるものなるを示さんとて、大凡その結構、不慮に趣りて、心中に畢るの躰裁に由らざるはなし。茲を以て、筋の爲めに、格を沒し、事を先にして、人を後にし、千篇一律、單に『行違ひ』の一事を作の秘訣となすやに思はるる傾向もなきにあらねど、もとより一世の天才、百代の巨腕にして、直覺、同情、溢るるが如く、人情の極致を穿がち、千古の心胸を刺す。たゞに、其戯曲を讀みてさへ、涙、潸たらしむ。況んや、彼が本來の目的の如く、之に節をつけ、之を人形に躍らせなば、聞くもの、見るもの、誰か人世の絶命に絶え入らざるものやある。

故に、「名譽心」「不注意」の二題を以て、巣林子戯曲中の人物に臨まば、啻に其女性のみかは、男性も亦た皆な然りとせざるを得ず。吾妻、おさい、が不注意なる如く、勝二郎、權三も亦た不注意。おさん、お千代、が名譽心に驅られたる如く、治兵衞、半兵衞も亦た、名譽の奴ならん。されど、此の所云ゆる名譽なるものは、即はち、義理なり、彼の所云ゆる不注意なるものは、意外の命運に驅らるるの躰なり、巣林子、本來、此の命運と義理とを以て、人情至誠の『愛』と衝突せしむ。故に、其の描いて、名譽と見せ、不注意と見する所ろのものは、素と、人物の性格に賦與せんとするものにあらず

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して、寧ろ人生の實相として觀ぜしめんとするもの也。左れば、文士、此の面目を辨まへず、彼が戯曲中の女性に、此の特色ありなど言はんには、彼は其心の知られざるに不平ならん、彼の女氣質とするものに於ける吾輩の所見は、之と異なる。

朝鮮國の家庭

在朝鮮國義州府の知人、さきごろ一書を致し、中に水仙花一輪を封じて言へらく、見わたせば雪皚々、破屋すゝけて自から暗黒、内外ちとの趣味なく、天地一輪の花なし、但だ、曩に金州より來れる人に水仙花根半莖をうけて、愛護鞠育し、近ごろ初めて「花」と云ふものを見ることを得たり、敢て其の一輪を呈す」と。

朝鮮人民について聞く所ろ、總べて是れ醜、彼等は、惰弱、虚僞、無氣力、無精神の半腐肉塊の如く言ひ嘲さる。茫々たる半島の景色や、國、國を成さず、人、人に非らず。さりとては、情けなき墮落の狀態かなと、秋恨冬枯の哀れ止むとな

く、むかし梅花に一詩を賦せし風流道士の末代は、今や寞索として一つの見るべきものすら無きことよと、只坐ろに歎かれたり。

然れども、朝鮮人民も亦た人也。すでに、人なり、安くんぞ其間だに情美靈善の消息全たく亡びたりとすべけん。一個、丁汝昌の美なる最期に、万千、聞くに忌まはしき卑劣國民の評價を一變したり。朝鮮は、今や吾保護國なり、何となく、弟の如く、子分の如く思はるゝの故か、否な左る故のみならず、眞とに人類たり一國民たるの品位に於て、少こしは、麗はしき美談のあれかしと望まるゝぞ、本邦俠士が眞懷ならめ。左れば、玆に、冬がれの破窓より、花二つ三つを觀ぜしめ、朝鮮國亦た春意なきにあらざることを示さん。

（一）伉儷の情

朝鮮人親子夫婦の情交きはめて篤し。就中、伉儷の交はりに於て、太はだ濃やかに、至つて温たかなるを見る。東學黨主領全捧準の捕はれて、京城に引かるゝや、夫人某、容顏尤とも美にして、風姿極めて文細なるもの、慣れぬ旅路に身をやつし、恥かしき姿に面をあらはし、哀乞々々と連呼して、其

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人が引き行かるゝ後を追ふと二百韓里、其聲きはめて悲しく衞士が腸を斷つ。嗚呼、可なり、釋し放たんかと思ひたると屢々なりしが、朝命止むとなく、警吏は尙ほも引立てたり。

（二）　叔姪の義

東學黨知名の副首領某捕はる。其弟も亦た名あり。かねて蹤索せらるゝものなれば、此兄に迫りて彼が在跡を尋問し、言はざるによつて遂に拷鞫するに及べど尙ほ白狀せず。僅かに告ぐるようは、吾が弟は余に優りたる人物なり、もし彼にして生存らへば、東學黨の精神尙ほ存すべし、たとひ余にして殺ろさるゝも、彼は則はち助けざる可らずと。昻然として信ずると固し、已むとを得ず、之を斬りたるに、暫らくして、後ろの山の小草を踏み分け、忽然出で來りて伏して陳ずるものあり。余こそ即はち彼が弟にて、見えがくれに後より尾け來り、兄君の万一に救はれんとを祈り候ひしに、先刻、山上より遙かに眺めて果敢なき御最期を見參らせ、此上、最早や生き存らふべき樂しみなし、速やかに斬つて兄の冥途の從者たらしめ玉へと言ふ。兵士も、哀れに懷ひて、今更ら無くもがなと心には惜しみたらんが、兼て京城より申聞られたる知名の張本人の一人なれば、見逃すべき樣なく、其儘縛に付けたり。然るに、又もや、後ろの山かげより靜々くだり來し十一才計りの小童あり、伏して涙を垂れて申すようは、此は余が叔父君にて候、叔父君の余を愛し玉ふと、生の父に異ならず、今日まで眞の子にも優りて慈しみ玉ひ、遙かに父の御最期を見て、代つて訴へんとせしを强ひて禁め、後に遺し玉ひしを只今强ひて參りしなり。あはれ、海山の恩高き叔父君の縛を解き、不束ながら吾を代えて罪し玉へと哀請せり。兵士は人の情けに感じて、斷腸の思ひあり、涙落ちて、義心禁じがたけれど、早や何如んともせん術なく、殊更ら叱り罵しつて彼の稚兒を追ひ返し、叔父と言はれし彼の弟をも兄とひとしく斬に處し、之を獄門にかけたり。然るに、其夜、何ものとも知れず、此の首一つを盜み去りけり。

〇滿溪春溜　　八木文卿

鳥來鳥去時氣。花落花開靄朝。有雪山頭影黑。無塵谷口聲囂。馮河不與苔滑。乘筏休從水漂。踐約欲行蕭寺。彷徨奈此斷橋。

〇祝基督復活祭（四月十四日）　　同

無水無山道不存。二千年後感遺言。春風吹送蘇生日。柳綠花紅總返魂。

爛煥

歌仙頼政

櫻井鷗村

とはむくつけきあらくれ男よとおもふ人の、をさなき兒等にうつゝ扱かしたる、心なき法師の心深き、一しほ心ゆかしきものなり。まして日頃は弓馬にたづさはる身の、いざといはば三軍を叱咤して、百万の敵をも壓するほどの益荒雄が、心のひまには、月に嘯き、花に吟じ、雪に詠じ、或は歌の坐にかしこまりて、思ひを練り、句を巧み、かくて天地動き、鬼神あはれぶいみじき歌をよみ出でたらんは、此道をひたぶるに此世の樂しみと弄べる文弱なる月卿雲客、あるは法師女房の歌よみにもまして、更に雅趣ぞ深かりける。義家と貞任とが、靡く旗手、叫ぶ矢筈のひまの一剎那に、衣川にて、衣の楯は綻びにけり、糸の亂れの苦しさに、と連歌しけるは、今の世までの譽れにて、また彼義家が勿古曾の關に、駒とめて。

散るはなを、なこその關と、おもひしに、
みちもせにちる、山櫻かな。

と、其折りのやさしき心動したるは、將軍が武勇のいみじさ故に更にゆかしく、關の櫻にとゞめて匂ふ名こそかぐはしけれ。那須の篠原の霰の、旅人が菅の小笠にたばしるといはんより、武夫が其矢並つくらふ、小手の上にたばしるさまを詠みたるはいとすざましく、おなじ初雁の聲ながら、大宮人が綾錦の蓐きてきゝたらんより、秋氣清き陣營に、楯を莚に、鎧の袖を片敷きて。

武夫が、鎧の袖を、かたしきて、
枕にちかき、初雁の聲。

と剛勇なる不識菴が情より洩れたるは、雅致の深さ廣さ果幾許ぞ。維新殉難の益荒雄が折に觸れたるあはれと憤りとを詠へし歌、或は征清從軍の武夫が、家に便りの端書の歌、此等は姿も言葉も調はぬが多くとも、其人に思ひあはせて優しき節々富めるを覺ゆるにぞ。

身武夫の列にありて、そが武勇の譽となめて、歌よみの名を優に世に殘せるもの、少からねど、中にもすぐれて優しく、また哀にゆかしきは、源三位頼政にこそあれ。此人が弓馬の業の譽れは、のぼず爪の繪にも美しければいはでもよし。さるにても此敷島の道にもたづさはりて、いと巧妙なりしとは、其世の歌垣の棟梁、俊成、俊惠等さへ、かなひがたく敬服したるにてぞ知られける。五條三位かつていひける。

俊惠は當世の上手なり。されど俊頼には。なほ及びがたし。俊頼は隙なく思ひいたらぬくまなく、一方ならずよめるが力も及ばぬなり。今の世には頼政こそいみじき上手なれ。かれだに座にあれば、目のかけられて、かれに事一つせられぬとおぼゆるなり。

なほ俊惠法師もかくぞいひける。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

頼政卿はいみじかりし歌仙なり。心の底まで歌になりかへりて、常に之を忘れず、心にかけつゝ、鳥の一聲なき、風のそゝと吹くにも、まして花の散り、葉の落ち、日の出入、雨雪などのふるにつけても、立居起伏に、風情をめぐらさずといふことなし。誠に秀歌の出でくるも理とぞおぼえ侍りし、（中畧）かの人のある坐にも何事もはえあるやうに侍りしなり。

歌よむとて、色濃るとより外は知らざりし、太平の世の可弱き公卿法師女房が類ひの歌よみにはあらで、弓馬の隙に戀に心掛けて、しかも其世の名流大臣をも、ひしぎたる手際は、其剛勇のほまれ高きまゝに、いよゝ心優し。頼政卿が或は月にかこち、花にうかれ、虫にあはれび、折々の秀歌さはなるを、些かとりいでゝ味ひ見んはいかに。

春月

暮ぬ間は、花にたぐへて、散しつる、
心あつむる、春の夜の月。

深山花

み山木の、其梢にも、見えざりし、
櫻は花に、あらはれにけり。

花

花さかば、告よといひし、山守の、
來るおとすなり、馬に鞍おけ。

江上螢多

いざやその、螢の數は、しらねども、
玉江の蘆の、見えぬ葉ぞなき。

夏月

にはの面は、まだかわかぬに、夕立の、
空さりげなく、澄める月かな。

海邊月

住吉の、松の木間より、見渡せば、
月おちかゝる、淡路しま山。

雲間月

よもすがら、絶間々々ぞ、またれける、
雲より雲に、移るつきをば。

閑居霧深

きりわけて、訪ふ人もなし、鹿のふむ、
庭の木の葉の、音ばかりして。

月照己屋

主人から、荒れたるやどの、くせなれば、
おろしこめても、月は見えけり。

行路時雨

晴くもり、時雨する日は、常盤木の、
かげに幾度び、駒とゞめけむ。

關路落葉

都には、まだ青葉にて、見しかども、
紅葉ちりしく、白川の關。

後朝の心を

明ぬとて、かへる涙に、くれぬるを、

暮れぬといひて、なほやゆかまし。

戀

命あらば、もしあふとも、ありやとて、
　我なぐさむる、わがこゝろかな。

幽玄にして趣味深く、巧妙なる歌どもなり。都には青葉にて云々の歌の如き、そが本歌なる能因法師の「都をば霞と共にたちしかどあき風ぞふく白川のせき。」と姿も情もかはらねど、かへりて彼をおしへすべしと、俊惠評しき。能因はすきものなりけり、この歌をよみ出でゝ、これまこと羇旅の歌なりけむには、哀れは更に深かるべく人の見んとや思ひけん。それよりしばしが程は、人にも逢はで、庵室に閉ち籠り、顔を日に暴して色黒く焦し、食をへらして、面骨高く、髯鬢々と生ひたるころ、人にあひて、力なげに我こそ久しく行脚して、陸奥までもゆき、白川の關に吹く秋風の身にしみて、かくぞよめりける、あはれとも見よやといひしとかや。さるすき事をして、いかばかりの苦しみしけんその歌を、たゞ一時の間に此武人が爲に、やす／＼と壓し倒されけることをかしくもあれ。

近衞帝の御惱みやすからざりければ、必定變化のものゝ業なめれ、變化のものを射留めべき仁は、賴政ぞ候ふらんと召し出されて、滋籐の弓ひやうと引き放ち、たゞ一矢に殿上の鵺を仕りて、御惱を安らげ奉り、叡感の餘、一口の御劍を下されしとき、雲井の郭公二聲三聲音づれて通りければ、御劍を取つぎ賜はらんとて、御前の階半ばゝかり下りいでられたる宇治左大臣殿、之に催されて。

時鳥名をも雲井に揚ぐるかな。

とありければ、賴政左の袖を眞額にかざし、月をすこし仰ぎつゝ。

弓張月のいるにまかせて。

と連歌せしかば、賴政こそ、武藝にも限らず、歌道にも優れたれと、時人賞嘆措かざりしとかや。また二條院の御時にも、召し出されて、雨中の鵺を射て、宸惱を靜めたてまつりて。衣一領賜はりて、右大臣公能公が。

五月やみ、名をあらはせる今宵かな。

とありしにそへて。

たそがれ時もすぎぬと思ふに。

とぞいひける。人々昔の養由は、雲外の雁を射、今は賴政、雨中の鵺を射たりとて、感じあへりしとぞ。武藝の道の譽れは、この如く、敷島の道の譽れも、かくの如し。賴政こそげにやさしき武勇の人にてありけれ。

賴政は歌仙としての、譽れある名を、其世の濟々たる名流大家と併せ傳へらるべきほどの、巧みなる歌人なりけり。さるに一度其家の集を繙きて、情至りてふかく、また哀れにしぬばるゝは、雅趣酌むべく、巧妙賞すべく、幽玄慕ふべき、月雪花の詠めならで、無乃此等によせて、おのが世にあえぬ嘆きをなげき、流も清き源氏の裔の今に及びて、涸れ／＼なるを悲しみたる、をり／＼の歌どもなり。賴政とは誰ぞ、流れを淸和の末に享け、祖先賴義、賴信、義家などの武名は、鬼神

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

をも挫くばかりなりしに、あはれ其猛き族の、源氏も末世の不運に逢ひぬれば、衰へ果てゝ、昔の名殘いとかすかに、殘は朝廷に並び立ちて、天が下の武事を、共に預かりたりし、平家の一門は、他をおしへして、時の勢猛に、雲井の空に翔り揚りて、榮えいみじきまゝに、源氏いよ〳〵衰へ、あはれ爲義父子は保元の亂れに亡び、義朝は平治の亂れに喪せ、其餘は處々に散り分れて、世を忍びたるさまなり。たゞおのれ賴政獨り、なほ餘命を朝家につなぎ、地下にかゞみて、わづかに家の昔のかたばかり殘せしのみ。武勇の譽れ、當時の出頭にて、誰れ比ぶるものもなかりしに、族平氏の仇なりければ、用ゐられず。思へばいかにかなしかりけん。昔は八幡太郎、三たび弓箬を打ならし、前陸奥守源義家と聲高らかに、名乘りしのみにて、聞く人の身の毛をよだゝせ、鬼神をとり挫きて、堀川院の御惱を愈し奉りたりしに、今の己れは、弓を射放ちてあやうく鵺を仕留めたるにぞ、今昔考へ合すれば、源氏の武威の衰へたること、かくばかりかと、いかになげきけん。

思ひきや、雲井のかけはし、おりしより、
　　下がしもにて、あらんものとは。

平家の族は、雲井に翔り、源氏の末は、地下に這ふ。このなげきある、もとよりなり。述懐を氷によせて。

我れが身や、ふる河水の、うすこほり、
　　むかしはきよき、ながれなれども。

とよみつ、清和源氏の末流の、衰へを嘆じ、更衣に寓しては。

夏衣、みどりの色も、かはりなば、
　　こゝろのうちや、涼しからまし。

とよみ、禁中柳垂に寄せては。

紫も、あけもつらなる、庭の面に、
　　まだみどりなる、玉柳かな。

とよみつ、昔し武門に、おなじく肩を並べし、族の者は、紫を着、紅をきて、月卿雲客の坐に、はびこれども、今は己も六位の末位に屈して、綠の衣のまゝなり。之を脱すべくして、志からざるを恨み、いまだ殿上を許されざりければ。

人知れぬ、大内山の、山守は、
　　木がくれてのみ、月をみるかな。

と、人知るとなく、世に逢ふとなく、武勇逞しき身の、なほ内裏守護の、賤しき職めに在ることを、悲しみたるのなげき聲は、上にもきこえて、これほどのものをと、憐れに覺して、昇殿をゆるされき。まだ四位なりければ、三位の望みかけて。

のぼるべき、たよりなき身は、木の下に、
　　椎をひろひて、世をわたるかな。

とよみて、三位は獲たり。後の世に、俳人不角なるものありけり。己が官職のいやしきを嘲ちて。

賴政が、ひろひのこせし、椎もがな。

との句を吐いて、昇官せしとかや。

手もかけぬ、雲井の花の、かげにゐて、
　　ちる庭をのみ、我ものと見る。

よそにのみ、おもふ雲井の、花なれば、
　　俤ならで、見えばこそみめ。

と、未だ昇殿を許るされざりし頃に、禁庭花をよめりしは、同じ坐にゐなみし、上達部、殿上人をいかに哀れがらせけん。

ほとゝぎす、まだこそきかね、我は世に、
あふちの花の、さかりならねば。

と郭公に寄せては、己が身の、運命つたなくて、世にあふちの花の盛りならぬをなげき。

天のはら、朝ゆく月の、いたづらに、
よにあまさるゝ、心地こそすれ。

と述懐を、在明の月の、人に見あまさるゝ様に忍びて、平家の族には、源氏の餘流よと煙たくおもはれ、世よりは贅物と見なされたり、おのれの運命を寄せて心憂き節をかたりき。

君がため、嬉しき事は、うれしきに、
わがなげきをば、なげきえもせじ。

おもひやれ、雲井の月に、なれ／＼て、
くらき伏屋に、かへる心を。

いづれ、不遇のなげきならざるはなし。歌道の名ばかりは、雲井に高く響きて、身はなほ谷がくれつゝ、世の盛りにしも逢ひがたきを恨みつゝ。

ことのはは、下吹かぜに、ちらしあげて、
谷がくれなる、わがなげきかな。

といへる歌となり、うき世のつらさに、身は更にふりまさり行くのかなしみを。

山のはに、入りなんとする、月かげを、
我によそへて、あはれともみよ。

と人にも訴へて、呉竹の憂きふし志げき世を遯れて、山に入りなんかともする志もありけり。不平と不遇とは遂に言の葉の數に、つくしをへせで、憂世に經るとも、もはやながゝらじとおもふ、七十いくつになりて、鈍くも謀叛企てゝ、高倉宮を奉りつ、令旨を諸國諸道に、冬枯れてかれ／＼のこりし、源氏の族に傳へて、恨みを平家に洩し、之をほろぼして、世を源氏の昔になさんものとて、京洛中を騷がせしも、埋木は遂に花さかず、なほ運命つよき敵の族のものに打ち碎かれて、平等院扇の芝の上に。

埋木の、はなさくことは、なかりしに、
身のなる果は、あはれなりけり。

てふ一首の辭世を、あはれに殘して、腹かききりて喪せにけり。身は埋木にて果てしかど、打碎かれし木の屑に、燃えつきし焰は、烽火となりて、源氏の餘流一時に競ひ起りて、平家を殲ぼしぬ。平家の族の者が、西海の月に、波に、なげきをのこせし、とり／＼の哀れなる歌どもは、賴政が昔しの恨みと共にのこりて、あはれなり。

武人にして、歌道に名だかゝりしもの少なからず。平忠度は、俊成が門に敎を受けて。

行きくれて、木の下かげを、やどゝせば、
花やこよひの、主なるらし。

漣や、志賀の都は、あれにしを、
むかしながらの、山櫻かな。

などの秀歌もありて、えがたき歌人なりしも、彼は武人とは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いへ、雲井高く坐して、月花を詠めし、可弱き公卿の類ひにて、敷島の道こそ、ひたぶるの務めとなれりきはなり。後の鎌倉右大臣とても然り、將軍には。

武夫が、やなみつくらふ、小手の上に、
あられたばしる、なすの志の原。

山はさけ、海はあせなん、世なりとも、
きみに二心、我あらめやも。

箱根路を、我こえくれば、伊豆の海や、
沖の小島に、浪のよる見ゆ。

の名歌ありて、縣居翁は万葉以後の一人とさへ、ほめたゝへしかども、此人も名こそ將軍とて、軍人らしかりけれ。まことは太平の世の、柔弱なる雲の上人なりければ、武人の歌仙よといふべき、ゆかしきふしなし。譽れを武門とならべて、歌垣に揚げしは、頼政卿こそ第一なれ。ことに此卿が世運つたなきのなげきを、月に花に雪に洩らせし、おほかる歌どもこそ、おもひあはされて、あはれなりけれ。(三月十五日稿)

乙女ごゝろ

花里

梅は香へど。鶯の音もきこえぬ。この浦里に。片々と天降る乙女。地におち玉へばふしぎや。たちまち影もなく。花は散り。人は移らふ。世の中になんとて。はかなきつゆの身を。猶をもうきにながらふらん。東の雲井をながめやり。戀しき君は。都にと思ふにさへ。むかしの夢のきえてわが身をかこつなる。けふこの頃のもの思ひ。たれにあかさんたれにつげん。いふも甲斐なき世の中に。のぞみたのみし君さへも。つれなく見すて玉ふにや。あゝ世にながらふ身をいかにせん。君なきこゝろはとこやみの。右も左も定め得ず。君には天の光あり。御神の姿もるゝぞや。いざや〳〵われは今より世をすてて。すみのころもを身にまとひ。なきて渡らん浮世の波を。

愛の鏡

花影子

(同志社文學第五十八號に現はれし美人の骸骨てふ文中の知らざる兄姉の愛を秋の夜月下に思ひめぐらして。「春のやよひ」の唱歌の譜にてよめる)

(一)
罪もうき世も　みないれて、
ひさりたゞづむ　わが身かな。
草木もつゆに　あらはれて、
こゝろをすます　虫のこゑ。

(二)
すみわたりたる　月かげは、
われらが愛の　まじはりに。
くもりなきやを　てらすため、
神のたまへし　かゞみかも。

(三)
まなびのまごに　かの君も、
月をながめて　いますらん。
あゝ天父(ちゝぎみ)よ　願はくば、
われらがこゝろ　てらしてよ。

(四)
空よりきよき　かの君の、
まことのあいに　みたされて。
うきしわが身も　さこしへの、
御くにのさまを　さとりけり。

(五)
月よりすめる　かの君の、
心のくもさ　ならぬため。
神よみたまの　たえまなき、
風吹きをくり　たまへてよ。

(六)
神の御手より　をくられし、
愛にしなくば　ほろびなん。
神よわれらの　まじはりを、
ここよのものさ　なしたまへ。

(七)
たさひわが身を　わすれても、
あまつみ親を　おぼえよさ。
別かるゝさきに　かの君は、
新のゝちに　いひましゝ。

(八)
そのみことばの　きよけさに、
なほなつかしく　なりにけり。
あつき心の　あらはれし、
みかほはいまも　忘られじ。

(九)
風さむけれど　かの君の、
いますかたへさ　ゆく月の。
影なつかしく　ながむ間に、
いつしかいたく　夜はふけぬ。

(十)
窓の月さして　いまははや、
われもやすみて　かの君の。
きよきゑがほを　夢に見ん、
神もわれらを　まもりてよ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

磯のうは風

櫻　精

おぼろ夜に小田の蛙の何になげく
山かげに櫻ひともと蘆の茶屋
紅葉ふみて見ぬ鹿さびし奈良の秋
花散らすこれやなさけの春の風
世を厭ふ花は深山に咲き亂れ
何草の魂さは知らず螢かな
待て暫ばしわれも血になく時鳥
桃咲ひて流るゝ水や御代の春
西行の笠にぬれふる胡蝶かな
春のゆく逝く川水の花いかだ
笠とりて浮世見て行く花の旅
さびしさの盛りや七日花遊山
鳥とまる枯木に暮れの秋高し
湘君の琴には堪えぬ月の雁
知るや人花の胡蝶のなれの果
山みちの暮れて一むら花のかげ
ますら夫の夢路につなぐ花の駒

黄鶴樓を讀みて

鶴去つて高どの椀る雲千年
蝶々のうつゝ浮世の五十年

鴫立澤

暮れかゝる澤のながめや鴫見えず
蜀山の旅にはゆるせほとゝぎす

蓮月が宿かさぬ人のつらさをなさけにて
朧月夜の花の下ふしと詠めるに和す

花に寐て今宵も安し月おぼろ
線香の煙りに浮ぶ人の世や
花もなし紅葉も見えず浦の秋
花見にと和尚むすめに連立ちて
風の枯れ野を吹ひて過ぎにけり
暮れかゝる柳のかげに花白し
今宵千里越路の月のおもはるゝ
夕暮れの鐘に散り行く花もあり
見も知らで戀しさせまる峽の春
日の暮れて花に立ちうき月おぼろ

北枝の調をかりて

惜しみけりされど櫻は散りすまし
すや〳〵とミルク離さぬ稚兒の夢
糸つなぐ小春の椽に猫ねふり

故山の冬夜しのびかれて

松にのみ聲吹く聲あり冬ごもり
猫ねふる小春の椽に綿づくり
居士うたに櫻ちりゆく木曾の春
さくら散つて今宵のどかや雨小雨
うぐひすに手拭かさう花遊山
花のなごり訪てくれの蛙鳴く
如何ならむ野中の井の深き春
笛の音の花にさはらぬ朧月
悲茄さゆる陣屋のぞくや秋の月

○春の山寺

春日さす山門の
　石あたゝかく
睡る狐の
　足うちのばし。
花に垂こめて
　春もや遁る
木魚の音の
　堂にきこゆる。
墓に遊ぶ蝶の
　死のどかなり
ソトバに花の
　咲きぞ亂るゝ。
夕暮れさそふ
　鐘はひゞきて
さこよに落る
　花の聲せず。

○園のうれひ

花の咲く
　偕にうたはず
花の散る
　同じくながめず。
眺めやる
　遙かの雲井
何處の春に
　君やまします。

焦るゝ夢の
　覺めてさびしく
またかき鳴らす
　想夫戀。

鐘落ちて
　櫻に明くろ
曉ながき
　うきよかな。

○春の夜のいのり（讚美歌四番調）

おぼろ月にほふ
　こしぢのよる。
かはづの鳴く音に
　ふけてぞゆく。

しづけき園にも
　ひとり出でゝ。
はなのした蔭に
　しはしあゆむ。

かはせの外には
　きこゆる無き。
すみゆくこゝろぞ
　いさしのばろ。

こゝろにあふるゝ
　しげきおもひ。

誰かは知るらむ
　誰に語らむ。

よするに甲斐なき
　うき世のたび。
ゆくての望みを
　如何に果さむ。

小いさきものをも
　すてざる神。
得ならぬねぎごと
　聽きあげてよ。

○深山の小河

いざ、深山の小河、われには語れ。
なんぢ、何處よりかは流れ來しぞ。
汝また、何處へ流れ去らんさする。
　潺々、悠々、逝つておやます。

此處は、誰れ知らう、深山の小河。
春は、花を乘せてながれ暖かに。
秋は、雁のすがたをやどして急ぐ。
　潺々、悠々、逝つておやます。

山ふかく、流るゝ水の意や如何に。
友は誰れぞ、こだまさむき猿猴か。
世知らぬ樵夫か、將た、月しろか。
　潺々、悠々、逝つておやます。

たゝずめば、姿ぞうつる清き水面
ツクヽヽさ、おもひ澄せば、万古。
聲は流れて、うき世の外にひゞく。
　潺々、悠々、逝つておやます。

されば問ふまに、なんぢのこし方。
今は、聞くまに、なんぢのゆくへ。
ながれゆけヽヽ、『永遠』の洋に。
　潺々、悠々、逝つておやます。

をさな子

泡鳴子

菜のは の さこ に うまれなば、
　やよひ の そら の やすくゝさ
　ゆめ見 も かろき 胡蝶 の 身。

あした の つゆ に そだちなば、
　野もせの かぜ に いだかれて、
　やがて かほらん 百合 の 花。

あま津御かみ の もりたまふ、
　きよく やさしき をさな子の
　すがた を やどす この世界。

うせにし 母 の まくらべ に
　ゆめ か、うつゝ か、うるはしく
　何に を ゑむらん そのゑがほ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さびしさの美と厭世

無識庵主人

余は前號の紙上に於て、さびしいとは何ぞやと題し、中にさびしさの美を論じて、さびしさの美は、靜にあり、幽にあり陰にあり、漠にありとせり、されど未だ盡さゞるも多きのみならず、他と關係する所は毫も記述せざりしなり、蓋しさびしさを十分に論せんとせば、我文學上の例證を引用すると共に、茶道、園藝等に及び、更らに泰西詩人等の例を引き來りて辨せざるを得ず、不幸にして身邊多忙、今之を爲すと能はざるが故に、唯其一部分に屬する厭世—本邦人の厭世—に就きて聊か略述しおかんと欲す。

我國民は到底世の所謂厭世の人民にあらず、鎌倉幕府以後、並びに其以前に於て厭世の詩人多少、輩出したりと雖も、こは佛敎の影響とのみ斷すべからず、佛敎の影響は素より與つて力ありと雖も、其の佛敎の一種をして斯く影響せしめし所因は、當時社會の實勢の然らしむる所と云はざるを得ず、即ち當時の社會は厭世の念を發せしむるの所因ありしが爲めに佛敎の一種をして、著しき影響あらしめたるなり。

高僧及び僧侶の和歌を詠ずるや、世を空蟬の果敢なきに比し夢の世に生存らうの不快を說き、うたかたの浮ぶ瀨に、さも似たらんが如く觀じ、西行が鴫立澤に隱れ、芭蕉が一蓑一笠を愛したる如き、所謂世を厭ふといふ中には、眞に世を厭嫌したるにあらで、寧ろ彼等はさびしさの美を愛したるものと云ふを至當なりと信ず。彼の熊谷直實の墨染の衣に隱れ、文覺の改悟せる如き幾多厭世的觀念を以て目すべきものなきにあらず、然れども日本の厭世詩人は、更らなり他の人民にも眞實に厭世の念を起こしたる現象は、甚だ稀有なるが如し。想ふに我國土にして風景の洵美を欠き、列國の壓服する所となりて、國民的自負心尠なかりせば、佛敎も今日の如き傾向を呈せず、所謂厭世の念なるもの國民間に蔓延したりしならん、幸にして風景の洵美なるあり、國民的自負心の强大なるものありて、遂に厭世を惹起するの事物を排除したり、

換言すれば、我厭世詩人の厭世といふは、さびしさの美を愛するとにてありしなり、茶道の事は曾て本紙上に天知子の詳說ありき、茶道の如きは之れさびしさを愛するの念より起りしと云ふべく、芭蕉の俳諧も亦さびしさを愛するに出てたるものなり、人或は禪味を帶ぶと稱するもの、之れさびしさの美を愛するの念發表したるのみ。

厭世は厭世なり、さびしさは、さびしさなり、共に同一にあらざるは明けし、而かも兩者の混同せられ、さびしさの美を愛するを以て厭世とするは誤解なり、何故にさびしさを愛するものを出すかは、論ずるの要なし、されど我邦に於て此現象の生じたるは、佛敎の影響と當時戰爭後の社會の實勢とに驅られしものに過ぎず、一時世の稱して高蹈派と目せられし人々の如きも、佛敎の高僧等を慕ひ、文學上には佛敎的趣味を愛したりしが如し、而かも厭世にあらずして、さびしさの

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

美を愛したるのみ、故に余は常に彼の高蹈派の人々を目してさびしさの美に醉ふ所のものとなす、從て、さびしさの美を味はしむるに至らしめしは、佛教の効なりと云ふべし。

斯の如く觀じ來れば、さびしさの美を愛する人は必ずしも厭世家にあらず、寧ろ思想感情の發達したるものに伴ふの現象なりと信せざるを得ず、靜淨を喜び、幽玄を慕ひ、廣漠を愛し、沈默を試み、閑寂を樂むもの、必ずしも厭世を以て目すべからず。斯の如きとは人生の一面に必ず存すべく、又存せざるを得ざるものなり、社會の進歩に伴ふて豈に此等の念減すべけんや、靜淨にありて始めて能く喧擾に處すべく、幽玄にありて始めて能く囂々に處すべく、沈默にありて始めて能く雄辯を振ふべし、一方にさびしさの美を愛するの念なきものは、社會にありて大預言者となり、大改革者たると難し、古來の大政治家、宗教家、教育者其他、史上に著明なるものを見るに、胸中自ら綽々の餘裕ありて、さびしさの美を愛せざるはなし、所謂英雄の閑日月とは即ち是れ。

唯夫れ此美を愛するや、一方面の事なり、されば佛者の如く之に溺れんと甚だ不可なり、社會進歩し來らんか必ずや此弊を排斥し去り、表裏適合よろしきを得るに至るべし、日本の國運は特に此種の念をして適宜の位地におかしむべし、評論は他日に讓る、(乙未二月十五日認)。

片々

○皇后陛下行啓紀事の文

左は、石黒忠悳氏（野戰衛生長官、陸軍々醫總監）が夫人久賀子どのに送られし文なり。陛下の有がたき御德を世に示し、同もに感謝せんとて、左に掲載す。

明治二十八年三月十七日

皇后陛下東京御發輿廣島陸軍豫備病院入院の患者御慰撫の爲行啓同十九日御着輿あらせられ直ちに香川皇后宮太夫をして翌日にも病院へ行啓在らせらる可き旨仰出されしも皇后陛下は御不例後殊に數日間滊車に召され御勞あらせられし折柄なれば一兩日は是非共御休養遊ばさせられ度旨達て申上げし故遂に同二十二日より隔日に各病院を巡らせ給ふとに仰出されたり

廿二日には御豫定の如く廣島陸軍豫備病院本院へ行啓在らせられ樓上に於て兒玉陸軍次官次に忠悳次に鍋島廣島縣知事土屋留守第五師團長佐藤軍醫總監を首め病院の職員たる奏任官に拜謁仰付けられ殊に忠悳には

昨年出兵以來我軍衛生上の經畫に心を盡せしを喜ぶ尙益々盡力せよ

との御詞を賜はりし故忠悳は是全く陸軍衛生部一致協力の致す所にして謹みて本日の寵榮を全部員に拜承せしむべしと御受け申上げたり陛下には草刈陸軍豫備病院長の御先導にて第一に士官病室に入らせられ在院士官患者の枕邊に立たせ給ひて一人毎に委しく病狀を聞こし召されて「此後尙篤と加養せよ」との有難き御詞を賜ひ次に下士卒の病室に渡らせられ重き患者には一々病狀を問はせられて夫々御慰撫の御詞を賜はりたり其間患者の起上りて陛下を拜し奉らんとするをば御差止めありて「起くるに及ばず大事にせよ」とのありがたき御詞を賜ひ尙患者の被へる蒲團をさへ親しく御手にて撫でさせ給ひて患者に適ふや否やを試みさせ給ふ此勿體なき御詞を承りて患者一同感涙に咽びしのみならず我々は勿論御後に隨へる人々まで覺えず涙を浮べたり次に歩兵少佐橋本昌世以下既に創所癒へ復務して當地に在る將校に謁を賜ひて御詞を下され又歩廊の側に整列し居たる患者へ（患

は最早創所癒え歩行散歩等に差支なき者なれば皆病室を出で此に整列し居たるなり）一同を御覽ありて「一同は名譽ある戰地に於て傷病を得て歸りしも今は創所癒え病治まり斯く立並ぶまでに至れるを見て甚だ悅ばし此癒えたる有樣を故鄕の父母兄弟等が見もし聞きもしたるならばさぞ悅ぶなるべし」と仰せられたり次に又清兵負傷者の病室を通御あらせられ敵ながらも負傷の有樣を憫然に思召され暫く立止まらせられて御覽ぜらる香川皇后宮太夫は陛下の御心中を察し奉り捕虜患者に向ひ一同大切に療養せよと申聞け通譯官をして之を譯し傳へしむるや敵の負傷者一同皇后陛下の方に向ひ合掌し涙を流して感激せりそれより元の樓上に還らせ給ひて更に佐藤軍醫總監を召され「病院には多數の患者を收容し去年來篤く治療に心を盡したる其結果のよきを見て甚だ悅ばし尙此上益々勉勵せよ」又草刈病院長を召させられ「病院職員一同の盡力により治療の結果能きを悅ぶ尙皆々盡力すべし」と仰せられ患者一同へ賜物あり其後暫く御休憩あそばさる此時余は陸軍々樂長に囑し戰時の婦人なる軍歌を奏せしめしに聞こし召されて後還啓遊ばさせられたり

廿四日午後一時より西練兵場の第一分院へ行啓あらせらる分院長二等軍醫正渡邊叅藏赤十字社理事首長清水俊に拜謁を賜ひ後各病院を順次御巡り在らせらる既に全癒に近き者は皆床頭に直立して迎へ奉りしに御氣色麗はしく「汝等追々全癒し顏色もよく此に立並ぶに至れるを見て甚だ悅ばし」との御詞を賜はり次に重症患者室に入らせられ枕頭にて「充分に治療を加へ早く全快せよ」との御詞を下し給へり外科手術室に入らせられ總ての機械を一々御覽ありて「病院にて最必用の手術室如此完備するは患者の爲尤も幸にして殊更安心す」と仰せられ更に各室を御巡覽あらせられて第十二號室に入らせらる此は極重症の外科患者にして每一室に一人を入れ特に每人に看護婦一二人を附する者なるが陛下は一々病床に就きて御慰撫あらせらる患者の起上りて拜し奉らんとせし者を御覽ぜられ渡邊分院長に向はせられ「あれを早く止めさせよ」と仰せられ且患者に向はせられては「心靜に療養せよ」と宣はせられ御涙を浮ばせ給ふを見て余も常に手巾にて眼を拭ひつゝ御供を申上げたりき更に十三號室の內科重病者をも同樣御慰撫あらせれし後第十四號室にて暫時御息遊ばせられ此際陛下は余を御側近く召させられて宣ふには「宮城の內にてすら寒さの時には屛風を立て廻はして寒さを防ぐに滿州の氷雪に暴されたる上に病の爲斯かるバラック病院に在る兵士等の艱苦はさこそと察せらるゝなり」と此勿躰なき御詞に接したる余は感極りて涙に咽び暫し御答も得なさゞりしが漸くにして軍人は兼れてより其身躰を鍛錬せるが上に既に北清の嚴寒すら凌ぎし者なると廣島は氣候寒からざるが故此寒さも感ぜず加之各室共寢具の用意充分なれば何卒大御心を安らがせ給へと恭しく申上げたれば陛下には殊に御安意の御樣子に拜し奉りし抑此病院の半分は赤十字社派遣員の受持なれば赤十字社醫員高橋種記を首め醫員看護婦取締特志看護婦人等には殊更に御通行懸け拜謁と御詞を賜ひたり「昨年以來能く其職務を盡したるを悅ぶ尙自餘の者にも此旨を傳へよ」との御詞を賜はれり斯くて各病室を御巡覽在らせられたり陛下御仁愛の深きは患者一同感泣せざる者あらず頓て便殿に入らせらるゝ陛下は第一號室の患者等が御通過後尙列を正しく寢臺の側に直立して敬禮しつゝありしを遙に見そなはせ給ひて「斯く身を煩して長く直立し居たらんには病を重らすの恐あらん心置きなく安臥せしむべし」との有難き仰ありければ御側に侍りし余を初め一同聲を飲みて只感泣の外なかりし此日巡らせ給ひたる病院の步廊は長さ六百五十餘間の遠きをも少しも倦ませ給はず一々見そなはせ給ひ親しく御慰撫の御詞を承りし者誰か感涙に咽ばざらんや斯くて暫く御休憩の後午後二時三十分還啓遊ばさせらる

廿六日は雨天なるにも拘らず午後一時五分國泰寺村の第三分院へ行啓あらせらる（此日余は昨日馬關にて李中堂不慮の災難に遇はれし爲勅を奉じて佐藤軍醫總監と共に之に赴きしため不在なりし）便殿にて御休息あらせられ伊部分院長初め病院附職員奏任以上へ拜謁仰付けられ又在院患者へ下され物を賜はり分院長伊部軍醫正草刈軍醫長の御先導にて第五號室に渡らせられ患者を御覽ぜられて伊部分院長「彼等は最早顏色もよくなりたれば誠に悅ばし」と仰せられ又彼の患者等は凡幾日を經れば退院することを得るや」と仰せ給ひければ伊部分院長は恭しく御答申上げたりそれより順次各室を御巡覽あらせられ殊に重症の者には有難き御詞を賜りければ各患者は只感涙に咽びけり次に軍夫の病室を御慰撫あらせられんとの仰ありしが伊部分院長は人夫室だけは御見合せありたき旨申上げたれども陛下には御取上げなく終に入らせられたり此軍夫患者は概ね凍傷者にして手足腐爛し步行の自由ならざる者なれば其室に入御の際も病床に臥したる儘奉迎したり一々御巡撫あらせられし後便殿に還御あり此病院に在る京都府派出の赤十字社醫員看護婦等の勤務をも親しく見そなはせ給ひたり暫時御休憩の後同二時五分還啓あらせ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

らる

廿八日には早朝より折々雨降りし故いかゞかと思ひ居たりしに御豫定の時刻に御出門あらせられ午後一時十五分に白島の第二分院へ行啓あらせられたり分院長加藤二等軍醫正御先導申上げ御先發の勅任官より病院附職員に拜謁仰せ付けられ次に院長を召させられて患者一同へ下され物を賜はりて後順次に各室を御巡り在らせられ半ば癒えたる患者の立並べる者を見そなはせられ「皆々既に癒へて立並ぶまでに至りしは悦ばしき限なり尚能く養生して全く健康に復せよ」との御詞を下され次に眼科室に渡らせられ銃丸の碎片にて一眼を失へる者等には「嘸不自由なるべし」との御詞あり又第一軍の雪中に在りて遂に夜盲となりて歸りし八人の者には「夜間嘸不自由なるべし能く加養せよ」との御詞を賜り其後脚氣病者にて床を離るゝこと能はざる者の枕邊にて一々發病せし戰地の事など問し召されし上「篤と療養せよ」と仰せられ最後に呼吸器病の重病者のみなる室に渡らせられんとし給ひし時余は是より內は呼吸器病の重き者のみなれば其內へは平に御入りを辭し奉る旨申上げたれば陛下には入口に稍久しく立たせ給ひ一々病者の顏を見そなはせられ御眼に御涙を浮ばせられ「何れも輕からぬ容躰なれば篤と療養を加へ快方に向はんことを望む」との辱き御詞を賜り夫れより元の廊下を通御ありて御座に復らせ給ひ伍堂軍醫正加藤第二分院長渡邊第一分院長を特に召させられ厚き御詞を賜り又余を召させられて「連日各病院を覽そなはせられしに何れも淸潔にして萬事能く行屆き居ることを嘉みさせ給へり」是に於て余は昨年出征以來我邦の婦人が軍事殊に患者に對して貴賤貧富の差別なく熱心を表し就中身元の富まざる者までが盡力せしことゝ又日本赤十字社殊に看護婦の功績又廣島地方婦人が軍隊の宿泊に力を盡せる事外國婦人が病院に盡せる事業まで悉しく申上げ是必竟陛下御仁惠の餘風に因るものなることを上奏したるに陛下には「斯かる軍國の際に當り婦人が此くも心を國事に盡せるは誠に御嬉しく思召さるゝ旨」仰せられ暫くして還啓あらせられたり

三十日には吳の海軍病院へ行啓あらせらる仝日午前第十一時第一吳丸にて宇品を被爲發吳鎭守府にて暫時御休憩在あらせられ午後二時鎭守府を出御二時二十分海軍病院へ行啓遊ばされたり島田院長を初め副長以下高等官整列して奉迎せり陛下には直に便殿に入らせられ暫くして院長副長其他高等官に拜謁を賜はり其後院長の御先導にて各病室に入らせられ戰鬪患者に向はせられては「能く身を公に奉じ傷を受くるに至る能く療養の効を積み速に全快せんことを望む」との御詞を賜はり又平病患者に向はせられては「公務の爲め疾病を招く能く治療を加へよ」との御詞を賜はりたり戰鬪患者は勿論平病患者に至るまで九十餘名の患者は君恩の洪大深厚なるに感激し御後影を伏し拜みて感涙に咽ばぬ者はなかりし又患者一同へ下され物を賜はり再便殿に入らせられ島田院長を御側近く召させられて「治療の功甚宜し爾後益々盡力せよ」との御詞を賜はり軈て吳鎭守府へ還啓あらせられ三時仝府御出門第一吳丸にて四時同港を御出發あらせられ廣島に還啓遊ばさせらる

各病院行啓の概畧は前に述べし如くなるが今又今回の行啓につきて陛下の厚き思召の廉を尚述べ奉れば凡此假病院は何れも開戰以來俄に假建てせる建物にして茅葺又は板屋根にて壁もなく只鋸引の儘にて鉋も用ひざる板を以て四方を圍ひ如何にも質素簡約なる小屋同樣の病室なれば本院の他へは行啓在らせられては實に恐れ多きことなる旨申上げたれども陛下には少しも御厭ひ在らせられず今度は病者慰撫の爲なれば如何に見苦しくても患者の居る所ならば行きて慰撫すべしとの有難き仰にて步廊椽側又は敷石荒板の所にても薄縁も敷かず鉋もあてず平日の儘なる假病院へ行啓在らせられ且又病室は板敷にても衣被寢具等の淸潔なるを賞めさせ給ひしは吳々も御意を注がせ給ふの密なること誠に有難く感佩し奉りし所なり

去る廿二日より引續き各病院を巡らせ給ふ內雨天風日には御順延遊されてはと香川皇后宮太夫を經て申上げたるも陛下には今度は患者慰撫の爲に行啓あらせらるゝこと故患者にさへ障りなくば天氣の如何をいふべきにあらず一日も早く各患者を見んとて延ばされ給はざりし

患者に向はせられて下さるゝ御詞は皆其大御心の溢るゝ計の御仁心より出づる故に患者は勿論御側に在る我々も只感泣に咽びし計りなりされば余は平生聲も高く詞も明かなる方なれども御詞を拜するごとに感極りて聲くもり覺えず小聲にて其御詞を患者に傳ふるに至れり餘の人も同樣なりき

各病院長を首め職員等に皆有難き御詞を賜り實に身に餘れる光榮にして此後は愈々益々治療に懇切に万事に盡さゞればならざることを一同心肝に銘したり

此御仁惠の勿躰なきは只に患者の感佩するのみにあらずして彼の戰地にある軍人が之を傳へきゝしならば嘸かし勇み進みて一層の勇氣を起すなるべく又患者の親

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

族が此事を承りしならはさぞ喜ぶことさなるべし

皇后陛下には曩に東京陸軍病院に行啓あり今度廣島病院に遠く行啓遊ばされ戰地より歸りたる患者を御慰撫在らせられしも第六師團の患者は下の關より歸り此には居ること少きを以て御覽遊ばされざるを以て殊に小松宮妃殿下を召され小倉、福岡、熊本、佐世保等の陸海軍病院へ遣され御慰撫の御沙汰あらせられたり

抑此度各病院へ行啓在らせらるゝや其際病院に居りし者のみ此御恩庇を受け奉りしのみならず内外各地の陸海軍病院に在る者は皆等しく其光榮を拜受せるものにして必竟戰役に從事したればこそ此恩榮を拜受せるものなり平時病に臥するや王公大臣と雖病床に行啓あらせらるゝことなどは思ひもよらざることなるに國家の爲に戰役にて傷病を得し故にこそ此恩榮を拜受するなれ

余や陸軍に身を致し當年にて廿五年いかに心と身とを職事に盡すかは其許の常に知らるゝ所なり況や万歲一過とも謂ふべき今度の戰役をや焦心苦慮身を以て職に殉して毫も恨なきは上に聖明なる兩陛下在ますを以てなり今此概畧を記して皇德の厚きを知らしむよりて家族知人によく語り聞かされ度候

三月三十日夜廣島にて

忠　憲

久賀子どの

◉高等女學校の數學　「數理會堂」は、其第十四號に於て、高等女學校規程第六條數學科の程度につきて論評すらく、女子に初等幾何學を授けたりとて所謂る猫に小判にして裨益なきのみならず却て心力發達を害ふの恐あれば、幾何初歩とせられたるは勿論正當の事なり。又云く、近來算術教授に就て一種無形の障碍物を生ぜり、彼の理論或は實用に偏するの論これ也と。

◉結婚心得　金澤の「北國新聞」は、三月九日より同廿三日に至る紙上、大抵連日に結婚心得を講じ、周密老巧の注意を告げたり。地方に於ても、社會改良の議論やゝ行はれ初めけり。

◉校書庭訓　右に對映するものは、函館の「北海民報」に、四月八日以降、藝者の庭訓を講ずるにてありけり。世は樣々のものなり。

◉人情學　と題して「時事新報」のノンキ散人が譯述する所によれば、近頃ろ、米國婦人社會の歷々にて「男子の性質中、婦人の心に尤とも嬉しく思ふは何なりや」との問に對し樣々の答ありしが、殆んど皆な一致せし答は其「勇氣」にありとするものにてありき。

◉山形の女學　山形縣の師範學校女子部廢せられし爲め、數年之に熱盡せし鈴木みれ子女史が大阪に赴くを送るとて、眞摯熱愛の言を寄せて該縣下女子教育事業の必らずや再興せざる可らざるとを告白せしものあり。（山形自由新聞）。一時の衰勢片田舍に及びしが、之を快復せんとするの輿論は今や亦た片田舍まで行はれんとしつゝある也。

◉女教師の服裝　女學生の服裝を質素にすべきとを內訓せらるると、東京に於ても地方に於ても、近比頻々たり。之を矯めんには、女教師たるもの先づ自ら摸範となりて質素の風を示さゞる可らず（教育時論）。

◉戰後の社會に　婦人會勃興すべしと論ずるは、「每日新聞」の東根子なり。

◉信濃の女學　信州上伊那郡中澤村に於ては、大ひに女子教育奬勵策を行へり（信濃每日新聞）。

◉女子高等普通教育を地方に普及せしむべし　とは、信濃每日新聞に、佐藤和美氏が投じたるもの也。

◉松田道子來信　の一節に云く、某氏が過日の會に、日本の教會は當地の教會に比して遙に純潔なりと申されしが、一方より考ふれば過說に非ず候、之につき聯想いたし候は、小女が同志社女學校にありし時、或る西洋來客の勸話を通辨せし人が、會堂を譯してお寺といひ、寺參りの語聽衆の耳にひゞき少こし異樣に聞こえしが、只今思ふに寺參の語決して不當にあらずと感ぜられ候事の候云々。

◉女子大學を設立すべし　隨分利刀を揮つて亂麻を斷ち得る手腕を備へ居る婦人諸君も多ければ也と「救世」は論ず。

◉朝鮮人姜璟熙　「救世」紙上に朝鮮教育を論じて、且言く又女學校がなければいけませんと思ひます、何故かと云ふと女子も男子と同じで一寸も違ひがありません、女子の中でも豪傑が澤山有りますから、學問をさせて國中の男子と女子が皆な立派な人に成つて文明開化の境に行くのが一番愉快な事ですからで御座います。

◉何ものの愚ぞ　日光に遊廓を新設せんとす（下野新聞）新らしく醜汚を發こして古來の名塲を穢がさんとする乎。

◉源綱紀氏　死去の報に付、吾社は陳謝せざるを得ず。此は確かなる社友某代議士の報道にかゝりしが、必竟、源綱紀氏の誤まりとは分りし也。されど中央、開花などの新聞に、本社が彼妻女の文を贋造したりと言ふに至ては、情けなし。かの

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

頼紀氏が妻女の文章を知らるべし。

◉裁縫教場の座倚何如　高知の高等女學校に於て此の議論あり。遂に、授業、監理、衛生等の上に於て、腰掛けの方大に優るとして之に决したり。

◉裁縫女學校　なるもの、府下本町一丁目に再興せり。其初は明治二十五年に起りしものとか。

◉產婆　の數全國を通じ、本年一月一日の調査にて、內務省免許の者千九百〇三人。（衛生新報）。

◉月給の多寡　を言はば、魯士亞皇帝が、日に二万五千弗の收入あるより、合衆國の大統領が同じく、百三十七弗を受くる迄、さまぐの階級あり。トルコ王は、一万八千弗。アウストリア皇帝は、一万弗。日耳曼皇帝は、八千弗。伊太利王は六千四百弗。女王ビクトリアは、六千三百弗。ベルジウム王は、千六百四十弗。フランス國大統領五千弗。

◉日本婦人矯風會　に關する英文の報告は、デントン女史の擔任にて、本月よりジャパン、エバンゼリストに見はる。女史は、來年、ウイラード、ソマーセット二女史を渡來せしめたしとて熱望せらるる也。

◉卒業生　此期の卒業生姓名左の如し、（上）

明治女學校第八回卒業（廿六名）

高等文科卒業　福田トリ。佐藤キエ。新海フミ

同　撰科卒業　久保ハルヨ

普通科卒業　西川セツ。本間イノ。大澤マツ。大城キン。吉澤シゲ。高橋ミツ。中ハツ。久保トク。栗原ムメ。山口ツル。松原テル。松田鳴音。松田シイ。藤戸ミス。後藤ミサホ。佐藤ヒサ。菊地ツ子。須郷ヤエ。鈴木チヨ

同撰科卒業　松井スエ。遠藤ハナ。八木原ギン

女子成立學校第七回卒業（十二名）

三原豐。藤田倉。渡邊更。藤代セイ。澤田芳原。高野運。遠藤チカ。留守巨梅。板垣千代。鈴木哲。志賀操。千野エン。

跡見女學校（十五名）

千家國。奥村八百。松野利根。三條豐。中村敬。角田四三。石井初。佐藤絹。安田暉。石田常。福原梅。淺田幸。牛込幸。竹山靜。

名古屋清流女學校第四回卒業（三名）

土本政。岩井信。筒井貞。

岡山山陽女學校第五回卒業（八名）

手藝科…片岡常。龜山キミ。園部トヨ。中堀トク。黒川キシ。八木岸。小坂縄。杉山チセ。

◉米國の養蠶獎勸　米國政府は國內に養蠶を奬勵せんとす其奬勵條例案を提出し國會に於ては去年より審議中なる由右條例案は左の如しと

養蠶奬勵條例案

第一條　農務卿は本條例の定むる所に依り同省昆虫課に命じて養蠶を監督せしむべし而して農務卿の必要と認むる場合によりては養蠶奬勵の業を助けしむる爲め同課に次長を置くを得べし次長の年俸は二千弗にして農務卿の定むる處により別に旅費を給すべし

第二條　農務卿は合衆國に養蠶を普及せしむるの目的を以て全國に五個所の養蠶試驗場を設置すべし養蠶試驗場は其設置地の農事試驗場の一部たるへし而して事業は農事試驗場長の監督に從て施行すべく場長は農務卿規定せる規則及び規程に從ひ該事業を執行すべし

本條例に從ひ設置すべき各試驗場の經費は年々五千弗とし該試驗場を設置せる農事試驗場長が爲め農務卿の請求により合衆國々庫より之を支出す農務卿は必要と認むる場合に於ては試驗場の要する金額を減少し若くは之が支出を中止するの權を有す。

◉目覺ましや米國の女子　米國の女子に高等教育を受くる者の增加する者の割合は、實に目覺ましき者なり。女子の中學に入り、大學に入る者の割合を增加し、從て女子にして、醫師、教師等となるものは、著しき速度を以て增加せり。殊に教師に女子を增加するは最も著しき者にして、今より五年前（千八百九十年）には、合衆全國に於て男教師十二万五千五百廿五人に對する、女教師の數は二十三万八千三百九十七人なりしが、其後二年を經たるに、男教師には三千九百七十四人を減少し、女教師には一万四千三百八十三人を增加せり。此割合にて進まば、教師と云ふ職業は、全く女子に占領せらるべきこと明なり。現時に於てさへ、女子が教師として用ゐらるるは、決して小學校に限るにはあらずして、中學校師範學校は言ふまでもなく、大學の教師たる者も亦甚だ多し。米國女子の働きは、實に目覺しき者と云ふべきなり。（教育時論）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

松山高吉先生著

きやうと
（名所と美術の案内）

全貳冊（紙數凡六百頁）最上和紙　名所古跡圖畫四十餘枚挿入（諸名家筆）着色木版（製本寸法竪六寸横四寸）優美なる和風　正價金八拾錢市外遞送料金六錢。

●本書は京都名所（江州及び丹波等之名勝も添ふ）本邦美術（京都神社佛閣に藏する什寶記ー東洋一般の美術に及ふ）を內外人に指示するに在り

●本書〔第一編〕には京都史。皇宮史。美術史。を掲げ〔第二編〕には京都市內及び近傍の名所〔第三編〕には遠方の名所〔第四編〕には繪畫。彫刻。漆髹。陶器等の沿革由來を示し次に各美術名家の傳を記したり〔第五編〕には滊車。人力車。電氣車。旅亭。料理店。郵便電信。通運會社。銀行及び諸會社。諸工塲等をあげ凡そ遊覽者に必要と認むる雜事は細大洩さず此編に收めたり。**本書の特色**古今有名なる人の詩歌を加へて雅興をまし歷史文學に關する條には古今の典籍に徵して解說を附言し工藝美術に係はる所は亦是詳細にその傳を添へ以て學者美術家の便を計りたり。**本書の特色**京洛有名の畵伯が得意の揮毫に係る名所風色の畵圖四拾葉餘りを書中に挿入したれば先生の名文と相俟て紙上に一層の光彩を添へたり加之懇に傍訓をさへ附られたれば兒童も亦能く之を讀みて其樂みを與る事を得千里の遠きに居るも山光水色を目のあたり見るの心地せらるべし要するに繁に流れず簡に失せず高きに傾かず鄙しきに陷らずして花實共に備はる世に名所案內記多しと雖も蓋し本書の右に出るものなかるべし四方の諸君幸に一本を購ふて其實を知り給へ

發行所　京都寺町通四條上る町　田中治兵衛

大賣捌所　東京神田表神保町　東京堂書店

●婦人科小兒科專門
赤阪區丹後町一番地安藤邸角　女醫　大村のぶ子

孤女學院製品大販賣
東京芝區巴町七番地　鈴木庄三郎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眞光

吾等は今の時の大に傳道すべき時機なるヿを覺り、翻つて道を傳えよとの御聲を天上より聞く。

吾等は、傳道の主旨は、基督の福音を宣傳し、其の靈氣を世に活かすにありと信ず。然るに、主の福音に維ゆるに、人の説を以てし、パンに石を混じて人の食わざるをむ責るヿの多きを覺る。吾等は、單純々精の福音を宣傳せざる可らざるを感ず。

吾等は、宗派の僻見を尤とも不可とす。博愛、同胞、神子、兄弟姉妹等の聖なる語を吐くものは、身を以て之を躰せざる可らざるを覺る。故に尤とも宗派僻を破るヿの必要を感ず。

吾等は、日本諸教會の遂に統一して、日本に於ける眞の獨立教會の起らんヿを希ひ、眞乎の大日本基督教會の設立をヵナンを望むが如く望む。

吾等、是等の意見を以て、世に訴へ、同志に教を乞へるヿあり、曩に「世光」「基督教新誌」の名を以て、相列んで世に見えたるもの、是也。今や雜誌すら亦かく分立するの切要にあらざるを感じ、釋然合同して、玆に新らしく結搆し、「眞光」の名を以て、一層大に世上の有志に訴へんとする也。

讀者冀くは吾等が微衷を察し、惠わひに愛顧を垂れんヿを。是れ衷心の祈也。

毎月末發兌。　一册六錢(無郵税)

東京下六番町六番地　**眞光社**

四月三十日第一號發兌見本所望の仁は郵劵封入申込ありたし。

石田祐安編

岡山孤兒院

全一册二百四頁　定價金二十錢　郵税四錢

目錄

緒言

○第一章岡山孤兒院の設立者○第二章岡山孤兒院の起原及創業時代○第三章岡山孤兒院の發達及其概況○第四章岡山孤兒院の實業及教育○第五章三百人の大家族○第六章岡山孤兒院の日誌○第七章天下の同情○第八章岡山孤兒院の友○第九章誤解○第十章天人一體○第十一章信仰

發行所　岡山市門田屋敷　**岡山孤兒院書籍店**

文學界

毎月發兌　一册六錢　郵税五厘

文學界第二十七號

村居漫筆……藤村……第一頁
歌祭文の曲を聽く……鷗水……第四頁
たけくらべ……嗣出……一葉……第七頁
折ふしによめる歌……殘花……第十一頁
すりごろも……孤蝶……第十三頁
風流極彩色(下卷)……青葉内史……第十七頁
漫吟……洒竹庵……第十九頁
アンゼロ(三)……藤村譯……仝上

寄書

雙蝶(袖月)。霜夜のすさび(空花生)。春(北海の火名氏)。迷ひし此身(竹谷若葉)。

時文

不言不語を讀む。希臘思潮。氣質全集。西行物語。人物論。新刊雜誌。道念ヿやらいふものを尋ねられて。聖愛ヿやらしいいいかつめらしく仰せらろゝ方様へ。帝國文學の小說雜談の君へ。

發行所　東京市神田區神保町十五番地　**文學界書店**

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅四錢
（六版）百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
（信神孝父）腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
（話さき）猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可滅	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
（再版）文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	橫山雅男君著	同十六錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

戲曲 桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	二錢	郵稅二錢

發行所 女學雜誌社

本社取次書籍

- 大奧の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛）
- 日本の婦人（一冊正價五十錢、郵稅六錢）
- 女子の本分（一冊定價廿五錢、郵稅六錢）
- 透谷集（一冊定價三十八錢、郵稅六錢）
- 西鄉隆盛傳（一冊正價三十錢、五冊一圓八十錢）
- 岡山孤兒院（一冊定價二十錢、郵稅四錢）
- 救急看護法（一冊正價金卅錢、郵稅貳錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候　巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年四月廿四日印刷
明治廿八年四月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省認可）

女學雜誌社出版書籍

（再版）小公子　若松賤子譯　一冊廿八錢　郵稅四錢
（六版）百人一首講義　鈴木弘恭氏講　同廿八錢　同四錢
（信神孝父）腓立比物語　櫻井成明氏譯　同廿五錢　同四錢
（畫さき）猫と鼠　女學雜誌社編　同五錢　同二錢
吾黨の女子教育　巖本善治著　一冊十錢　郵稅二錢
木村鐙子小傳　同前　同十錢　同
公娼可滅　同前　同五錢　同
教育講義　同前　同十錢　同
日本女學　同前　同五錢　同
（再版）文法口授　鈴木弘恭君述　同十二錢　同
婚姻論　横山雅男君著　同十六錢　同四錢
產婦小兒攝生法　船越鼎太郎君著　同十錢　同二錢
邦文學　松山高吉君著　同二十錢　無郵稅
俳諧史傳　小此木信一郎 布川孫市 兩君同著　同三十錢　同四錢
善惡の岐　中島とし子著　同二十錢　同
廢娼演說　島田三郎 植木枝盛 兩君同著　同五錢　同二錢
西洋女禮　本社著　同十錢　同
小說の話　同　同十錢　同
兒育草　同　同八錢　同
藝者と手掛　炭谷小梅女著　同十錢　同

新刊書籍

戯曲 桂五郎　阿波鳴門左衛門著　十錢　郵稅二錢
高橋傳五郎　巖本善治編輯　五錢　郵稅二錢
偉人物　山月子稿　二錢　郵稅二錢

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

大奥の女中（上中下三冊正價一冊卅錢郵稅六錢宛）
日本の婦人（一冊正價五十錢、郵稅六錢）
女子の本分（一冊定價廿五錢、郵稅六錢）
透谷集（一冊定價三十八錢、郵稅六錢）
西郷隆盛傳（一冊正價三十錢、五冊一圓八十錢）
岡山孤兒院（一冊定價二十錢、郵稅四錢）
救急看護法（一冊正價金卅錢、郵稅貳錢）

書信は惣べて下六番町六番地宛にて御郵送被成下度候　巖本善治

女學雜誌定價表

前金	壹冊　金拾錢 一年前金　金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行　一回　前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 （廿七字詰） ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道徳なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年四月廿四日印刷
明治廿八年四月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY